

方見堂遺跡

— 熊本県八代市東片町所在遺跡の調査 —

1981

熊本県教育委員会

ほう み どう
方見堂遺跡

ひがしかたまち
— 熊本県八代市東片町所在遺跡の調査 —

1981

熊本県教育委員会

序 文

熊本県教育委員会では建設省九州地方建設局の国道3号八代地区拡幅工事に伴う埋蔵文化財調査を受託し、昭和55年8月から八代市東片町方見堂遺跡の発掘調査を実施しました。八代市片町地区は古墳が非常に多いところですが、方見堂遺跡は石材が散在していたことから古墳が存在した可能性があり、事前に発掘調査を行なうことになったものであります。調査の結果、調査地には古墳は存在しないことが判明しましたが、須恵器をはじめ種々の遺物が出土しております。ここに発掘調査の報告書を刊行し遺跡の全容を報告するものであります。本報告書が埋蔵文化財をはじめとした文化財保護に対する認識を高め、学術上の一助になれば幸いに思うものであります。最後になりましたが、発掘調査の実施にあたりましては建設省八代工事事務所や八代市教育委員会をはじめとして地元の方々の多くのご協力を得ました。ここに厚くお礼を申し上げます。

昭和56年3月31日

熊本県教育長 外 村 次 郎

例　　言

1. 本書は昭和55年度に建設省九州地方建設局の国道3号八代市地区拡幅工事に伴う事前調査として実施した八代市方見堂遺跡の発掘調査に関する報告である。

2. 発掘調査および報告書の作成にあたっては次の方々の御指導や御教示をいただきました。

八代市 中田良則・山田一人・山田祐次氏
宇土市教育委員会 一 宗雄・平山修一
高木恭二氏

佐賀県立陶磁器資料館 大橋康二氏

以上の方々に深く謝意を表する次第です。

3. 調査地での測量および遺構の実測には沢田宗順・米原圭子氏の助力があり、磁器のトレースには守江洋子氏の手をわざらわせた。本稿は江本 直が執筆した。

4. 出土遺物については、熊本県文化財収蔵庫に保管している。

5. 本書の編集は、熊本県教育委員会文化課で行い江本が担当した。

本文目次

序文	
例言	
第Ⅰ章 序　　説	5
1. 調査に至るまで	5
2. 調査の経過	6
第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境	7
第Ⅲ章 調　　査	9
1. トレンチの設定	9
2. 調査結果	9
(1) A-1 トレンチ	9
(2) A-2 トレンチ	13
(3) B-1・2 トレンチ	14
(4) 石材について	14
(5) 方見堂板碑	16
3. 出土遺物	20
(1) 須恵器	20
(2) 土師器	20
(3) 瓦	26
(4) 貨　　銭	26
(5) 磁　　器	26
(6) 網田窯産磁器の特徴について	43
第Ⅳ章 結　　語	46

挿図目次

第1図 遺跡位置図	8
第2図 調査地全体図	10
第3図 調査地トレンチ設定状況	11
第4図 A-1 トレンチ北側土層図	12
第5図 A-2 トレンチ西側土層図	13
第6図 A-2 トレンチ西側土層図	14

第7図	石材散在状態実測図	15
第8図	方見堂板碑実測図	16
第9図	方見堂板碑拓影図	17
第10図	茶臼山古墳四方仏実測図	18
第11図	茶臼山古墳四方仏実測図	19
第12図	出土遺物実測図 土師器（1・2）	20
第13図	出土遺物実測図 須恵器（1~11）	21
第14図	出土遺物実測図 須恵器（12~25）	22
第15図	出土遺物実測図（瓦1・2）	24
第16図	出土遺物実測図（瓦3~5）	25
第17図	貨銭拓影図（十）	26
第18図	出土遺物実測図 陶磁器（1・2）	27
第19図	出土遺物実測図 磁器（03・04）	29
第20図	出土遺物実測図 磁器（05・06）	30
第21図	出土遺物実測図 磁器（07・08）	31
第22図	出土遺物実測図 磁器（09~12）	33
第23図	出土遺物実測図 磁器（13・14）	34
第24図	出土遺物実測図 磁器（15~18）	35
第25図	出土遺物実測図 磁器（19~22）	37
第26図	出土遺物実測図 磁器（23~27）	38
第27図	出土遺物実測図 磁器（28~34）	40
第28図	出土遺物実測図 磁器（35）	42

図版目次

図版1	上：八竜山から見た方見堂遺跡	51
	下：調査地近景（北から）	51
図片2	上：方見堂板碑（右）	52
	下：方見堂板碑	52
図版3	上：石材散在状態	53
	下：石材散在状態	53
図版4	上：石材散在状態	54
	下：石材散在状態	54

図版 5	上：A－2 トレンチ（北から）	55
	下：A－2 トレンチ土層状態	55
図版 6	上：石材下状態	56
	下：石材下状態	56
図片 7	上：A－1 トレンチ土層	57
	下：B－1 トレンチ（南から）	57
図版 8	上：周辺遺跡（天神古墳）	58
	下：周辺遺跡（天神古墳石材）	58
図版 9	上：周辺遺跡（鬼の岩屋古墳）	59
	下：周辺遺跡（御経塚古墳）	59
図版10	上：周辺遺跡（茶臼山古墳四方仏）	60
	下：周辺遺跡（茶臼山古墳四方仏）	60
図版11	出土遺物（瓦・貨銭）	61
図版12	出土遺物（土師器・磁器）	62
図版13	出土遺物（磁器）	63
図版14	出土遺物（磁器）	64
図版15	出土遺物（磁器）	65
図版16	出土遺物（磁器）	66
図版17	出土遺物（磁器）	67
図版18	出土遺物（磁器）	68
図版19	出土遺物（磁器）	69

第一章 序 説

1. 調査に至るまで

建設省九州地方建設局の国道3号八代地区拡幅設計計画に伴い熊本県教育委員会では同地区的建設予定地について文化財調査を実施した。

昭和49年度、熊本工事事務所の踏査依頼をうけ、文化課の上野辰男、隈昭志と同事務所調査係長中島顕義氏が現地踏査をした。その際八代市指定史跡鬼の岩屋古墳群第1号墳（上片町1564番地）が拡幅予定地内にあったため、協議の結果、同古墳を保存するため、道路の反対側へ拡幅することとなった。そのほか現地踏査によって4カ所に遺跡が所在することが確認された。以上の遺跡についての発掘調査は建設予定地の土地買収が終了した後で実施することになった。昭和55年度は比較的用地買収が進んでいる八代市東片町地区の方見堂遺跡の発掘調査が計画された。

方見堂遺跡の発掘調査予定地は行政区で八代市東片町方見堂265-458番地の2筆からなっている。対象面積は120m²で265-2番地については昭和55年4月現在で用地買収が終了していたが、458番地については立木の移転問題もあり土地買収が未済であった。したがって当初5月には発掘調査を開始する予定であったが、土地買収が済むまで延期されることになった。

遺跡の所在する八代市東片町地区の国道3号は上下両線とも単線であるが、九州縦貫自動車の「八代インター」に近く、また西側の大田郷や十條製紙工場へと向う県道とも交わっている。従ってこの信号での車の混雑はひどく、八代市議会でも問題として取り上げられる状態であった。建設省九州地方建設局では混雑を回避するため暫定的に下り車線の複線化が計画された。このため、発掘調査予定地の東側約3mの拡幅工事が必要になり、この部分についての事前の発掘調査が要請された。再度、現地で八代工事事務所及び文化課の担当者が集まり、立合った結果、265-2番地については用地買収済みであり、458番地についても地主からの発掘調査の承諾が得られていることから調査の実施は可能であるとの結論に達した。

文化課は8月1日から発掘調査を実施する旨を八代工事事務所に伝えた。そして、今回の調査は拡幅工事が予定されている幅約3mの部分だけとし、残りの部分についての発掘調査は、立木の伐採もしくは移転作業が終了した時点で再度調査を行なう予定とした。但し、立木に影響がない状態であれば周囲の調査を実施してもよいとの回答もあった。尚、発掘調査の組織は下記のとおりである。

調査主体	熊本県教育委員会
調査責任者	岩崎 辰喜（熊本県教育庁文化課長）
調査総括	隈 昭志（ 同 文化財調査係長）

調査員 江本 直（熊本県教育府文化課学芸員）
調査事務局 田辺 宗弘（同 課長補佐）
大塚 正信（同 経理係長）
横尾 泰宏（同 技師）
矢野みゆき（同 主事）
整 理 上野 長男（同 主幹）

2. 調査の経過

昭和55年8月5日：熊本県文化財収蔵庫に準備をしておいた発掘調査器材を現地に運び終える。早速調査地の雑草の除去作業を始め発掘調査を開始する。午後はA地区の表土剥ぎ作業を一部行う。土嚢を作り道路側に積み上げる。また、建設省八代工事事務所、及び八代市教育委員会を尋ね発掘調査の開始を伝えご協力を頼った。

8月6日～8日：A地区の表土剥ぎと石材の露出作業を行なう。

8月11日～15日：A地区の表土剥ぎと石材の露出作業を続ける。後半は雨が多く作業が中断されること屢々であった。

8月18日～22日：長雨が続き作業が遅れる。

8月25日～29日：A地区の表土剥ぎ作業を再開する。露出を終えた石材については20分の1の縮尺で実測を行なう。又、200分の1の縮尺で平板測量も行ない全体図を作成する。

9月1日～5日：新たにA-1トレントレンチを設定し掘り込みを行なう。同じくB地区にもB-1・B-2トレントレンチを設定しB-1トレントレンチの掘り込み作業を始める。

9月8日～12日：A-1トレントレンチ、B-1トレントレンチの掘り込みに続きB-2トレントレンチの掘り込み作業を行なう。B地区のB-1・B-2両トレントレンチでは古墳に係る遺構は検出されなかつた。12日には方見堂内に祀られている板碑の拓本と実測を行なう。

9月16日～19日：主にB-2トレントレンチの最終的な掘り下げと清掃作業を行う。板碑の実測と拓本も終了し、A-1トレントレンチ北側の土層の実測も行なう。後半はA地区のA-1トレントレンチの南側にA-2トレントレンチを設け掘り込みを行う。

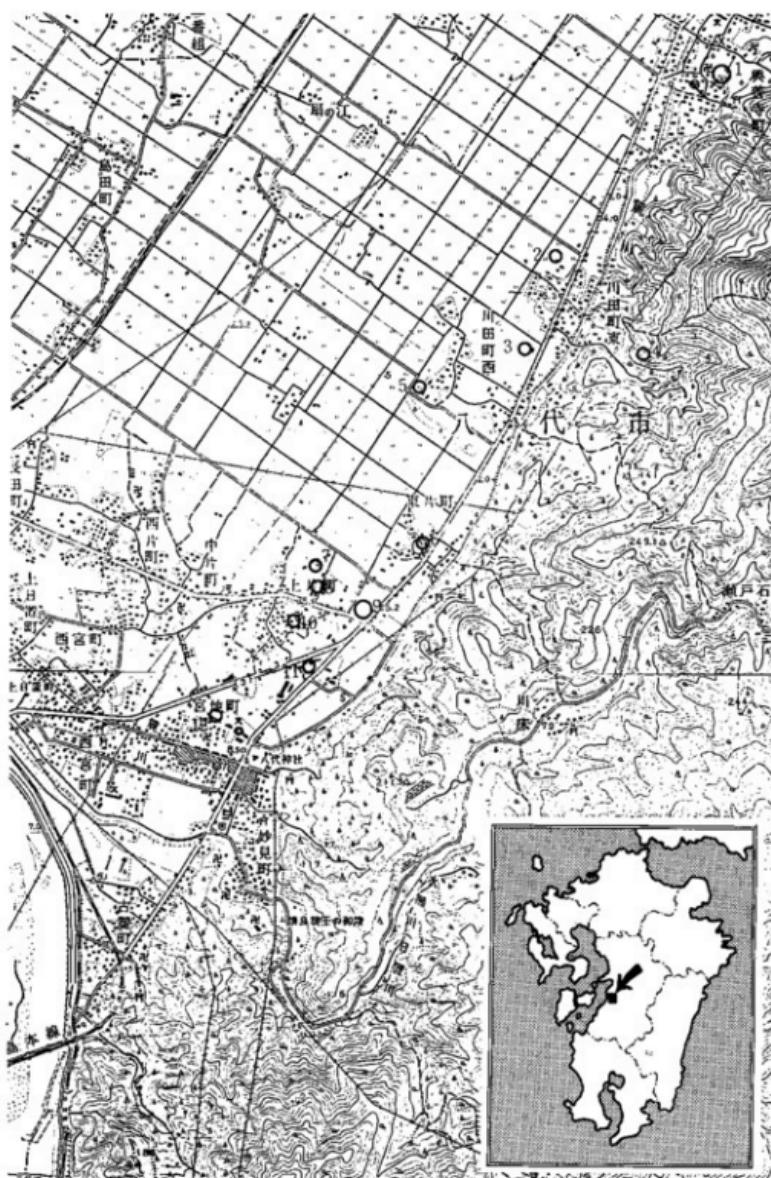
9月22日～26日：A-2トレントレンチの掘り込みを続ける。清掃作業を行なったあと写真撮影を終え、西側土層の実測をはじめた。

9月29日・10月1日：A-2トレントレンチの土層図を終了したあと図面等の最後の整理を行なう。このあと埋め戻し作業を行ない調査を終了する。10月1日、器材を整理したあと、器材及び遺物を文化財収蔵庫に運び終える。以後、文化財収蔵庫に於いて遺物の整理・実測作業を行ない、報告書の作成に取り掛かる。

第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境

方見堂遺跡は行政区熊本県八代市東片町方見堂に位置する。国土地理院昭和51年発行50,000分の1「八代」の北端から36.0cm、西端から27.9cmにある。広大な八代平野をとぎす九州山脈西端として北から小川町・竜北町・宮原町の丘陵が続く。八代市にはいれば油谷山・竜峰山・八峰山・八竜山などの山塊が南北に連なっている。本遺跡はこの竜峰山から八峰山へと連なる山塊の西麓下に当たっている。山塊に沿って主要な九州縦貫自動車道と国道3号とが走り、東片町地区は古来からの交通の要地である。現在も北側数百m地点には九州縦貫自動車道の「八代インター」があり、さらに本遺跡のすぐ横で国道3号と交わり球磨・人吉市・鹿児島・宮崎県へと延びるルートが決定されている。国道3号は球磨川を越え水俣市を経て鹿児島へと通じている。途中で左へ折れれば国道219号で球磨・人吉市へと向う。本遺跡に接して右手に折れば大田郷・十条製紙工場を経て八代市街、さらに八代外港へと通じている。

八代平野は稻作はむろんであるが、闇草の栽培が非常に盛んで、その生産量は日本最高をなしている。このような豊富な生産基盤を有する八代平野一帯には縄文時代・古墳時代を中心とした大きな遺跡が多い。八代市岡小路町や興善寺町・川田町などは従来から知られていた古墳群や興善寺庵寺に加えて、昭和51年から53年にかけて九州縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査の実施によって新たな遺跡や遺物の発見と内容的解明が進められている。近くでは東川田古墳群、西川田古墳群、東片町古墳群、上片町古墳群、乙丸古墳群と続いている。特に上片町古墳群の中の八代大塚古墳はよく知られている。昭和42年に発掘調査が行なわれ、全長55.8mの前方後円墳で、周溝部の調査によって須恵器・土師器に加えて人物埴輪の出土で知られている。また上片町古墳群の第1号墳は八代地方特有の鬼の岩屋式と呼ばれ、石室の奥行4.8m、横2.38m、天井までの高さ1.5mを測る巨石墳である。方見堂遺跡は東片町古墳群の一つとして捉えられ、古墳は北からむかいやぼ古墳・岡の上古墳・御経塚古墳がある。むかいやぼ古墳は円墳と思われるが内容的なことについてはあまり知られていない。岡の上古墳は消滅してしまい、御経塚古墳も破壊が著しい。方見堂遺跡は以上の古墳の南にあり、国道3号と大田郷へ向う県道とが交わる地点に位置している。付近の人の話では、昔、妙見さんが海からはじめて上陸された時、この地で「方」を見たことから、これを祀る方見堂がつくられたとつたえられている。現在、方見堂には地蔵仏を線刻した板碑がまつられている。この方見堂の前に古墳に使われたと見られる大きな石材が散在していることから、方見堂古墳として捉えられることになったものである。



1. 典善寺発寺
2. 車塚古墳
3. 東川田古墳群
4. 川上古墳群
5. 川田遺跡
6. 東片町古墳群
7. 八代大塚古墳
8. 茶臼山古墳
9. 方見堂遺跡
10. 高取山古墳
11. 鬼の岩屋古墳
12. 乙丸古墳群

第1図 遺跡位置図

第Ⅲ章 調査

1. トレンチの設定

調査地は当初265-2と458番地の2筆であったが途中から265-1番地を加えたため3筆となった。方見堂の祠は458番地にあり、石材は同番地に散在している。3筆の中で265-2、458番地をA地区、265-1番地をB地区に分けそれぞれ仮称した。

A-1トレンチは三角形を呈する265-2番地の底辺にそって東西5.2m、幅1.0mで設けた。A-2トレンチはA-1トレンチの中央から南側へ13m、幅1.5mで設けた。B地区はA-1トレンチから北側へ8.0m、幅3.1mで設けた。

以上のトレンチを設定することによって、調査地のほぼ全域に亘る遺構・遺物の存在状況を知るとともに、石材の周囲に古墳に関する遺構が存在すれば何らかの痕跡を確認できるであろうとの目的を持って調査を実施した。

2. 調査結果

(1) A-1トレンチ調査結果

北側断面を示そう。265-1番地は宅地で建物があったところで265-2番地との境界にブロック屏が設けられており小砂利の基礎固めも行なわれている。

第Ⅰ層 黄褐色砂礫層である。宅地にするための整地作業が行なわれており、その際に運ばれた客土で固い。

第Ⅱ層 黒色を呈するやや粘質を持つ腐植土で整地前の旧地表である。

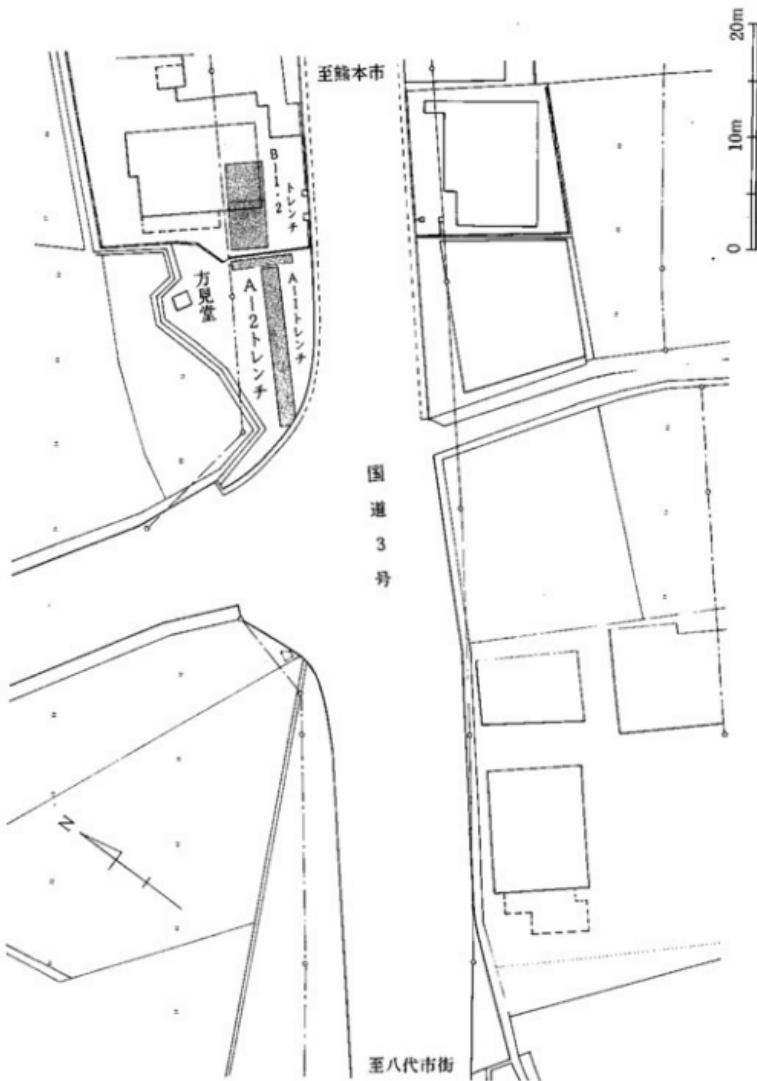
第Ⅲ層 茶褐色土で砂礫を含んでいる。黄褐色を呈する土塊がはいっている。客土である。

第Ⅳ層 黑灰褐色土で乱れた堆積状態を示している。礫石や瓦、漆喰、磁器などが混入している。第Ⅳ層は礫石がさらに多く混じっている。

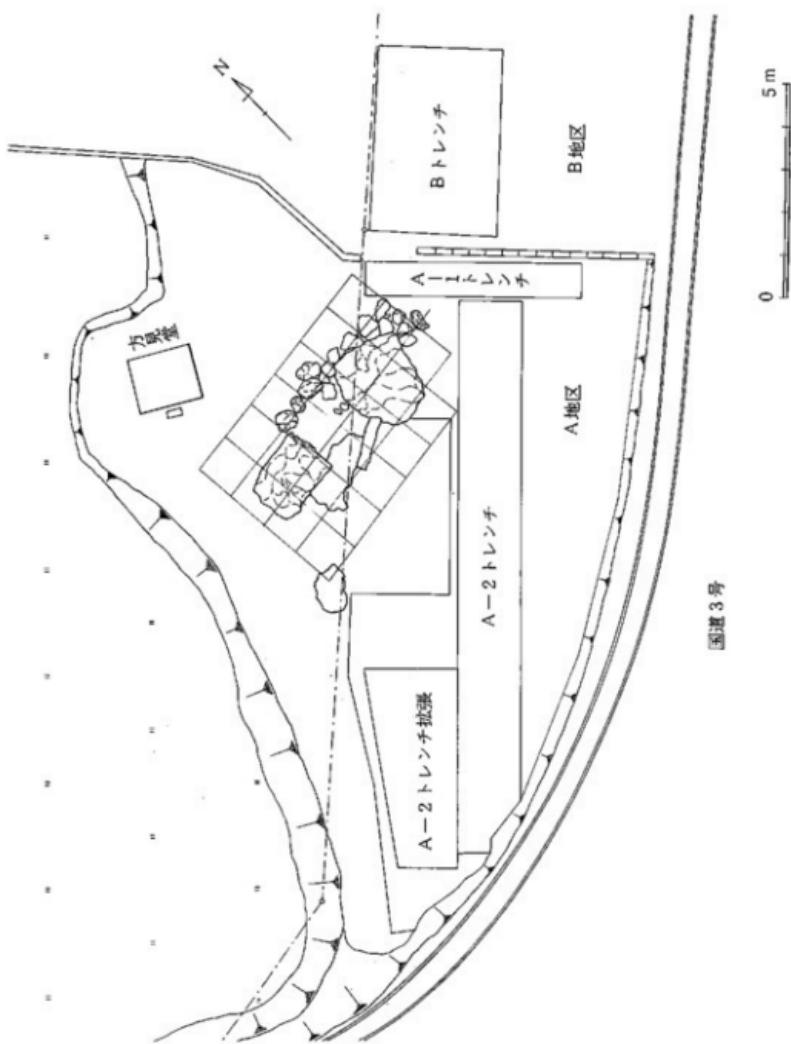
第Ⅴ層 茶褐色粘質土である。上層に比べて乱れのない堆積状態を示しており自然的作用による堆積土と判断できた。

第Ⅵ層 灰褐色粘質土で砂粒を多く含んでいる。第Ⅴ層と同じく自然的作用による堆積土と判断される。

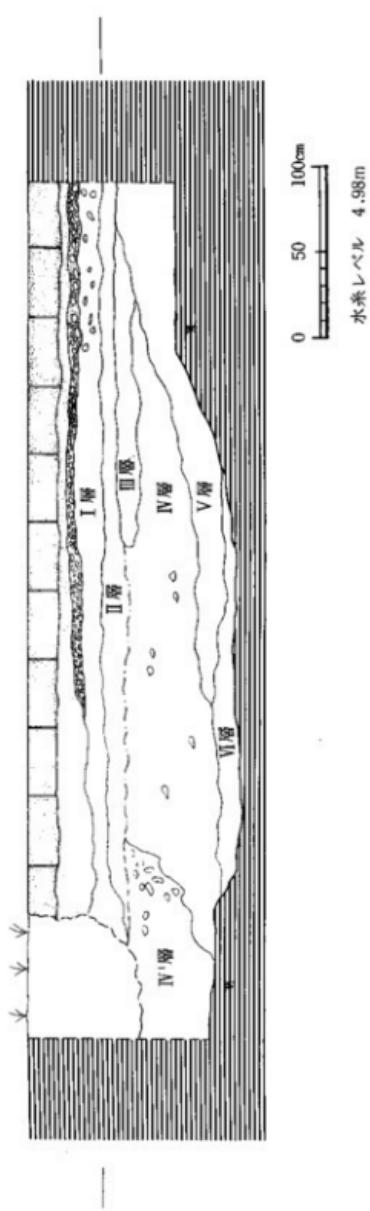
以上の第Ⅰ層から第Ⅵ層の層序状態を示しており、遺物は須恵器、土師器が数点出土した以外はいずれも近代のものである。元来、第Ⅴ層、第Ⅵ層に示される浅い溝状の落ち込みがあつたところを第Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ・Ⅳ'層の客土で整地が行なわれたものと思われ、第Ⅱ層がその時の旧



第2図 調査地全体図



第3図 調査地トレンチ設定状況



第4図 A-1 トレンチ北側土層図

地表であろう。出土する瓦や磁器から見て明治の頃最初の整地作業が行なわれたものであろう
さらには昭和時代に第Ⅰ層ほかの客土を行ない2度目の整地作業が行なわれたものと判断される。

(2) A-2トレンチの調査結果

A-2トレンチはA-1トレンチから南側に長さ13m、幅1.5mに設けた。最も北側にあたるところを一部深く掘り下がたが、この試掘部分での層序状態は次のとおりである。

第Ⅰ層 黄褐色土層で漆喰や瓦、磁器を包含している。上面の約15~24cmの盛土は現代のものである。

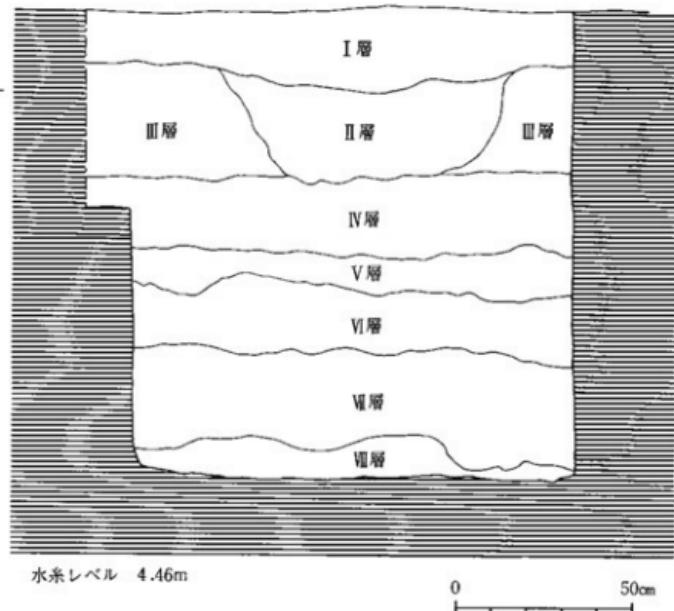
第Ⅱ層 黒褐色を呈し第Ⅲ層に切り込んでいる。カーボンや磁器を含んでいる。

第Ⅲ層 茶褐色粘質土で自然的作用による堆積土と思われる。第Ⅰ、Ⅱ層からの擾乱がある。

第Ⅳ層 灰褐色粘質土で多くの砂粒を含んでいる。広く認められ自然堆積土である。

第Ⅴ層 茶褐色土。砂粒を多く含んだ土質で粘性は弱まる。弥生土器の細片を含んでいる。

第Ⅵ層 茶褐色砂質土でサラサラとしている。堆積状態に乱れが少なく自然的作用によるものであろう。



第5図 A-2トレンチ西側土層図

第Ⅴ層 黄褐色粘質土。水分を多く含んでいる。

第Ⅳ層 茶褐色砂質土。第Ⅴ層よりもやや粘性が弱まり、より多くの水分を含んでいる。

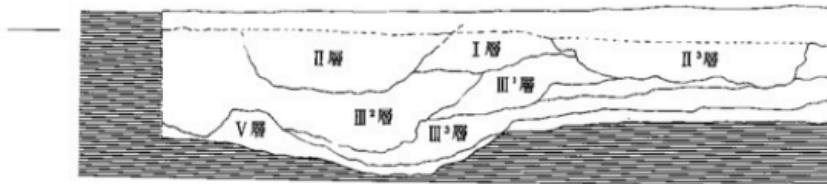
以上が試掘部分の層位である。これから南側についてはいくつかの落ち込みは見られたが、何れも瓦や磁器が混じっており古墳や住居跡などの遺構として捉えられるものは認められなかった。ただ、A-2トレンチの第V層から土器片が出土している。この土器は細片であり、多くを語ることはできないが胎土、焼成から見ると弥生後期土器と判断ができる。すなわち、第IV層が弥生後期の包含層で、レベル的には海拔約3.87~4.04mである。このことは、この地方の今後の弥生時代等の調査についての目安となるであろう。

(3) B-1・2トレンチ

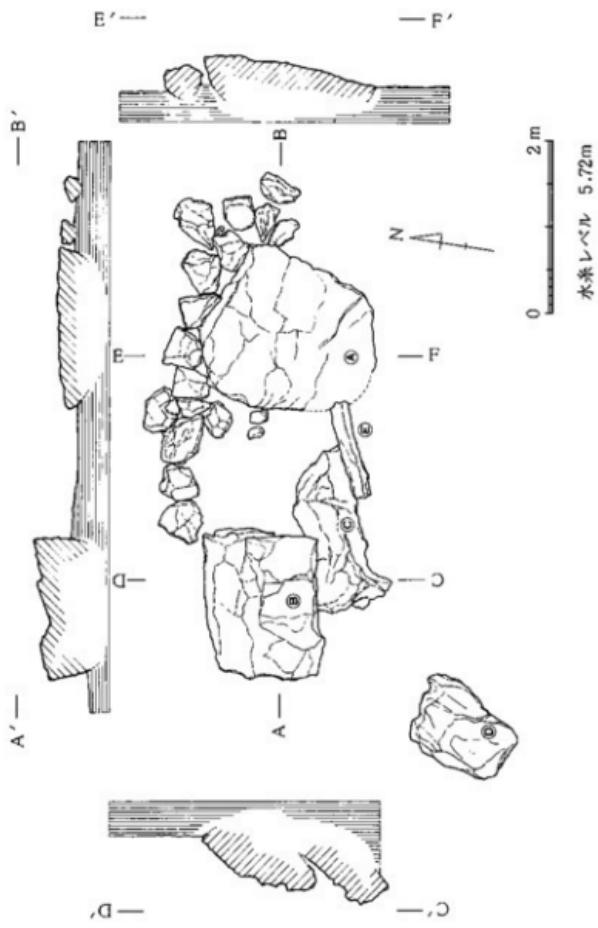
B地区はB-1・2トレンチを設けた。宅地とされていた部分で、基礎のコンクリートが残っていたため、この間を掘り込んだ。現在の地表から約2.1mの深さで掘り下げたが、古墳に係る遺構、遺物は認められなかった。宅地造成のために客土された土の中に瓦や磁器片が認められた。これらの遺物は何れも打ち欠けたものばかりで整地を行なう際にはいり込んでいたり、投げ入れられたものであろう。

(4) 石材について

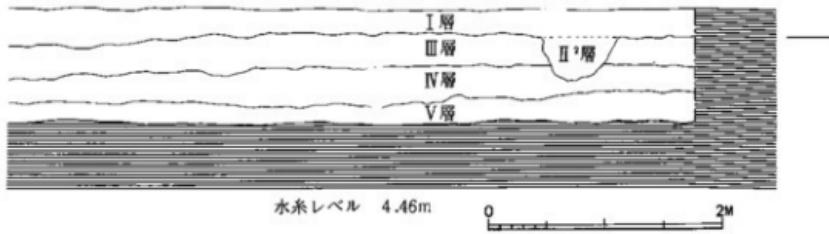
古墳に使用された石材であるとの断定はできないが、一応石材と呼称しておきたい。石材は265-2番地と458番地とにあり、方見堂の祠の横に大石が4個と小石が十数個あり、458番地の畦畔に大石1個が認められる。Aが最も大きく $2.13 \times 1.79\text{m}$ で厚さは70~80cmと推定される。石質は硬質砂岩である。B~Dは何れも石灰岩で、Eは凝灰岩である。Aの周囲にある小石群は何れも石灰岩である。石灰岩は付近の山腹に多く産する石材である。以上の石材には何れにも加工痕は認められなかった。又、石壙の石室等に見られるような規則的な配石状態ではなく、散在した状態と述べられよう。なお石材の下から瓦や漆喰、磁器等の出土があることからこれらの石材は極めて新しい時代に運ばれたものであることが言えよう。勿論、もし古墳に使用されていた石材としてもその原位置は全く保っていないことが述べられる。



第6図 A-2トレンチ西側土層図



第7図 石材散在状態実測図



(5) 方見堂板碑

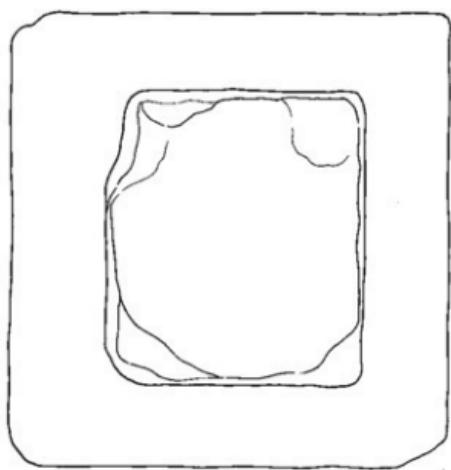
方見堂には板碑が1個とその横に数個の石材が安置されている。板碑は砂岩製で現況で最大長さ84.6cm、最大幅71.2cmである。周囲を乱雑に打ち欠き砂岩のため剥落がはげしい。中央部がわずかに残り地蔵仏の線刻が認められる。向かって右側に2本の線刻があることから周囲を巡らしていたものと思われる。地蔵仏には二重の後円があり右手に錫杖を持っている。一部、雲の表現がある。年号等の刻銘は認められないが、痛みが進んでいることなどから少なくとも江戸時代もしくは中世時代にのる時期のものと推定される。砂岩の板石を素材としていることから、古墳の石材に用いられたものの再利用とも考えられるが、推測の域は脱せない。周囲を割ったり打ち欠いたりした痕跡が多いが、明治時代に流行した排仏毀釈のためにによるものと見ることができよう。なお、第10・11図は近くに所在する茶臼山古墳の墳頂への登り口にある墓地に置かれている四方仏である。四方に仏像が浮彫りされ、観音開きの細工も見られる。文化?年八月とよめる年号が刻まれている。近くには五輪塔の破片も認められる。



第8図 方見堂板碑実測図



第9図 方見堂板碑拓影圖



|



0 5 10cm

第10図 茶臼山古墳 四方仏龕測図



第11図 茶臼山古墳 四方仏拓影図

3. 出土遺物

以上述べてきたように今回の主目的とした石材に係る古墳等の遺構は認められず、石材は極めて新しい時代に運び置かれたものであることが判明した。尚、A-1・2トレンチ及びB-1・2トレンチからは少なからず遺物の出土は見られた。遺物には須恵器、土師器、瓦、磁器、古銭などであるが以下主な遺物の特徴につき報告したい。

(1) 須恵器

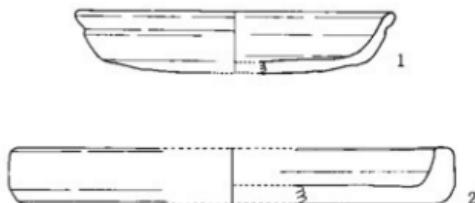
須恵器片はA・B地区からまとまりのない状態で出土した。各遺物についての観察結果は第1表に示す通りである。何れも小破片であり器形も窺い知る事も出来ない状態であった。殆どが壺及び壺の破片と見てよいが(01・08)については頸部への立ち上がりや頸部に櫛描波状文様の特徴を持つ事から器形は壺と思われる。

内面は殆どが円弧及び同心円文タタキが施され、外面は格子目文、平行タタキが見られる。色調は外面が灰色乃至灰白色を呈する物が殆どで、内面も灰色、灰白色、青灰色が殆どである。(03)がやや焼成不足で、所謂、赤ヤケの状態を示し、色調は内面が灰赤色、外面が鈍い橙色を呈する。(02・07・10・12)の一部には僅かに自然釉が付着している。以上のような状況であり、時期的な判断を行なうまでに至れない。

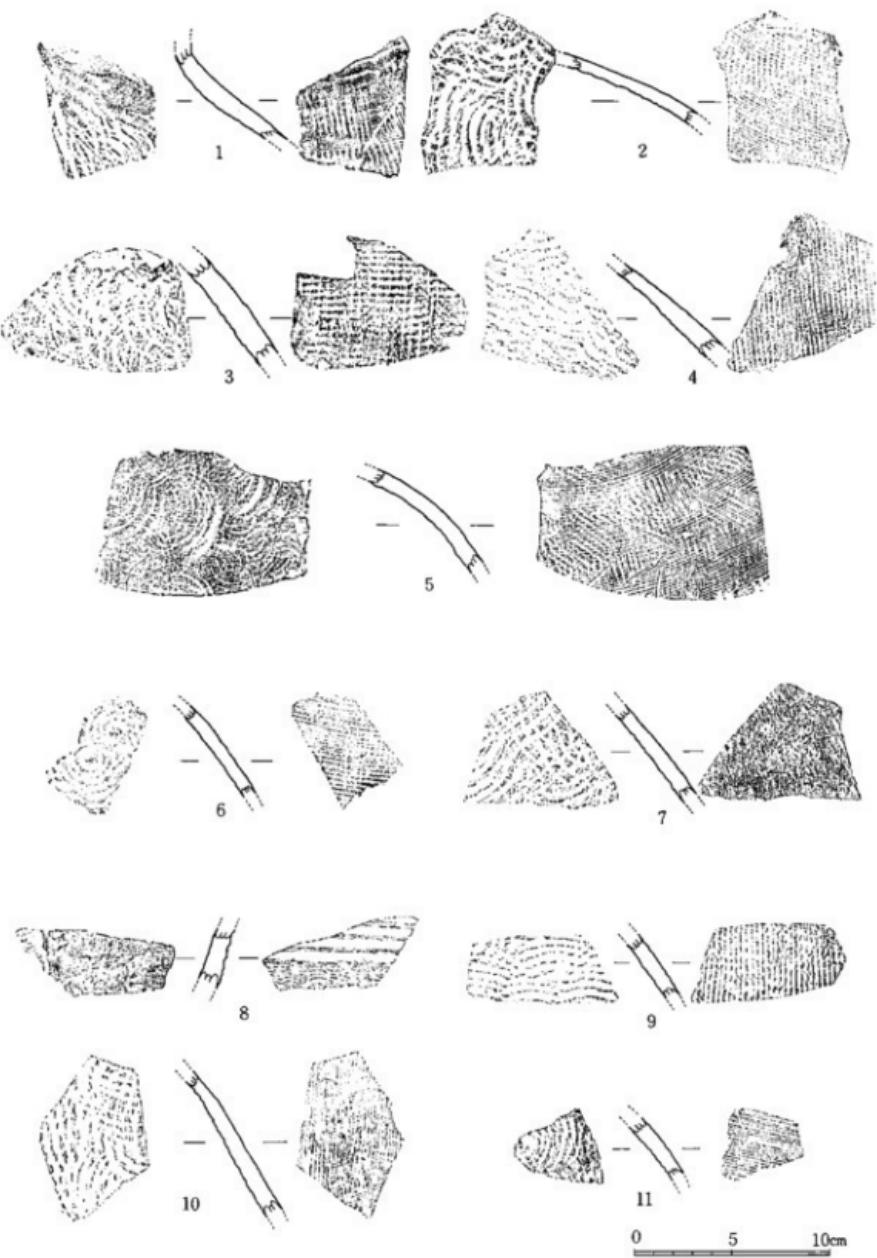
(2) 土師器

土師器は2点が実測可能であった。(1)は高さ3.2cmで口径は復原すると16.6cmを測る。底部はヘラ切りで外反し、立ち上がり、口縁部下で屈曲する。口唇部は丸く納まる。内面及び外面はヨコナデ調を施し、底部から体部にかけてヘラ削りによる調整がある。砂粒混じりの胎土で色調は鈍い橙色を呈している。外面に一部煤の付着が見られる。

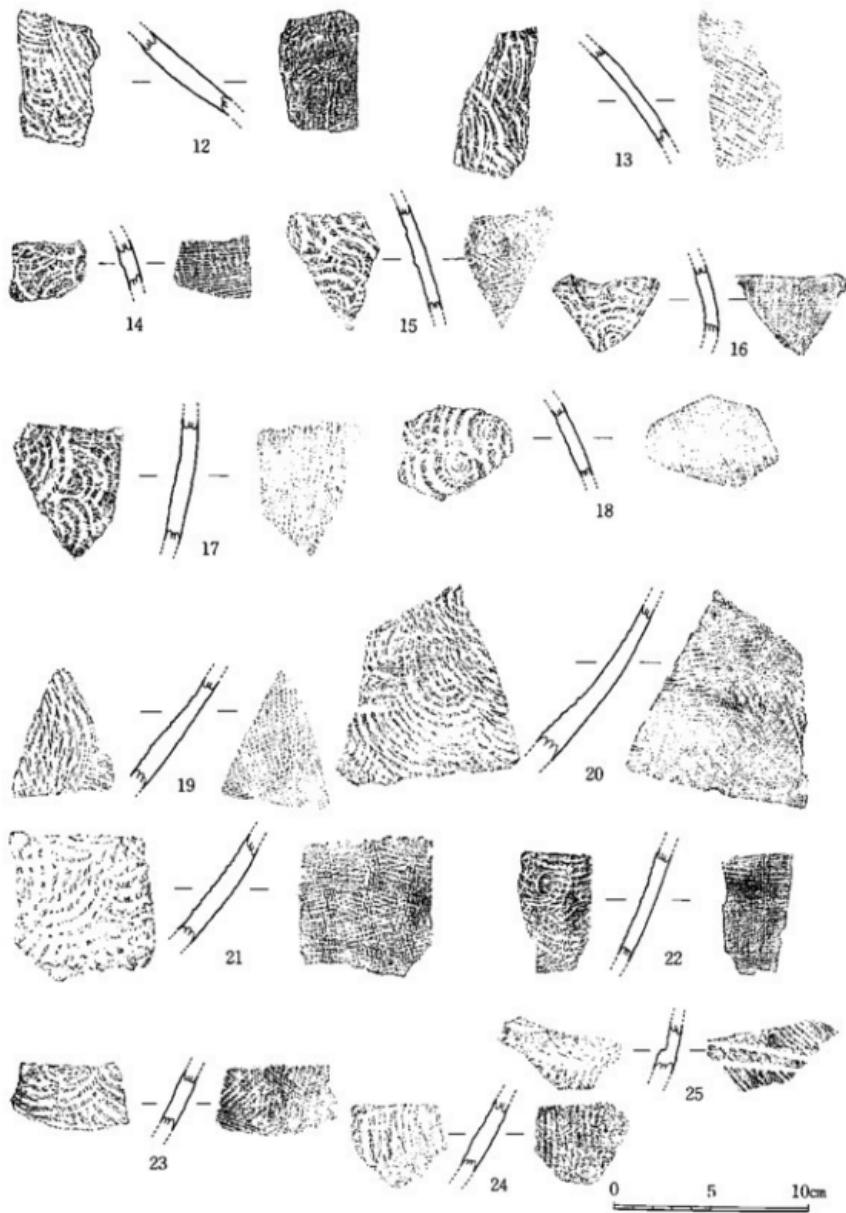
以上の2点の土師器は何れも器形は皿と呼べよう。用途及び時期的なものを明らかにしないが、中世以上に遡るものではないだろう。



第12図 出土遺物実測図 土師器（1・2）



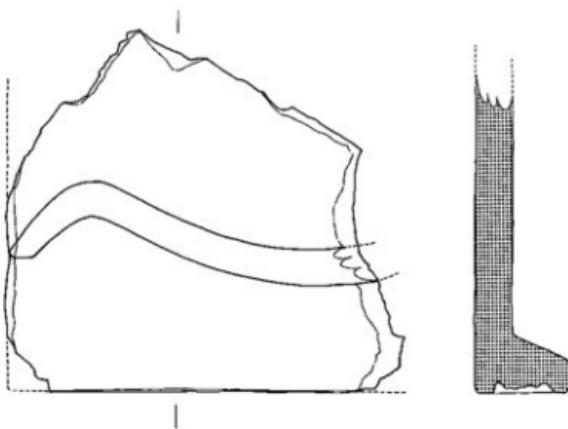
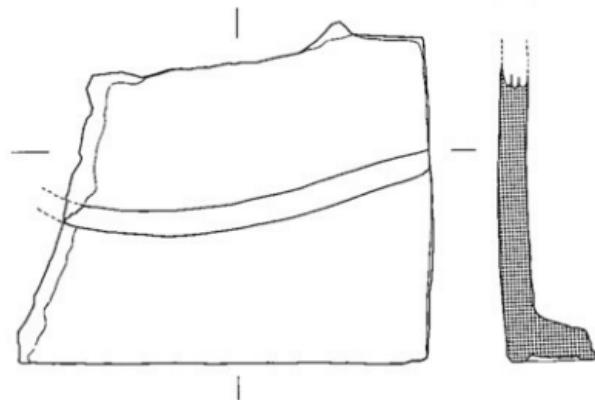
第13図 出土遺物実測図 須恵器 (1~11)



第14図 出土遺物実測図 須恵器 (12~25)

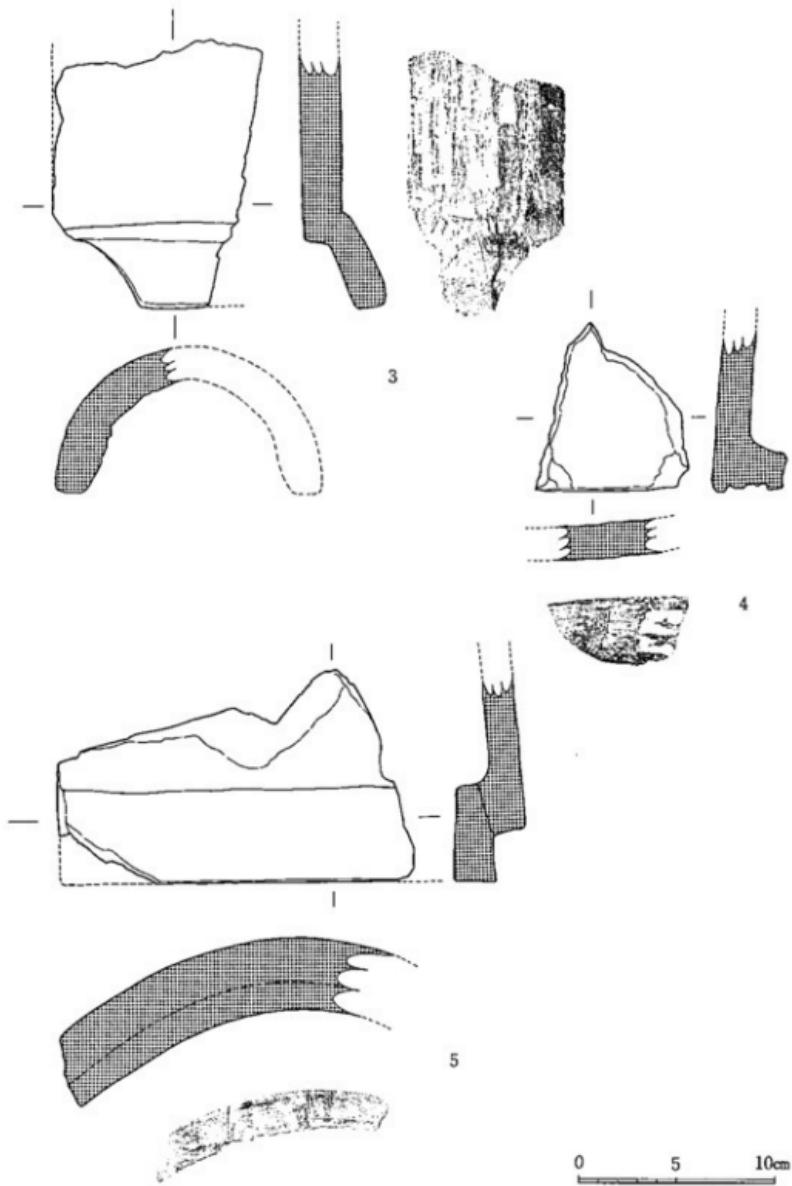
表一覽察視器須惠

種別番号	遺伝子番号	品種	部位	特徴	微成	胎土	焼成	色	出土地点	備考
第 14 図	01	壹?	肩部片	外面) 帽子底膨らみタスキ 内面) 背筋付タスキ	精良	良	好	内面) 明黄坯色 外面) 朱天色	A 地区上層一括	一部自然釉がかかる
第 14 図	02	壹 or 要	肩部片	外面) 背筋付タスキ 内面) 帽子底膨らみタスキ	白色砂粒混じり	良好	繊維	内面) 朱天色 外面) 白色	A 地区上層一括	一部自然釉がかかる
第 14 図	03	壹 or 要	肩部片	外面) 帽子底膨らみタスキ 内面) 背筋付タスキ	白色砂粒混じり	良	やや不足	内面) 朱天色 外面) 白色	A ~ 2 レンチ上層	
第 14 図	04	壹 or 要	肩部片	外面) 帽子底膨らみタスキ 内面) 背筋付タスキ	白色砂粒混じり	良	好	内面) 朱天色 外面) 白色	A ~ 2 レンチ一括	
第 14 図	05	壹 or 要	肩部片	外面) 帽子底膨らみタスキ 内面) 背筋付タスキ	白色砂粒混じり	良	好	内面) 朱天色 外面) 白色	B ~ 2 レンチ下層	
第 14 図	06	壹 or 要	体部片	外面) 帽子底膨らみタスキ 内面) 背筋付タスキ	白色砂粒混じり	良	好	内面) 朱天色 外面) 白色	B ~ 2 レンチ上層	
第 14 図	07	壹 or 要	体部片	外面) 帽子底膨らみタスキ 内面) 背筋付タスキ	白色砂粒混じり	良	好	内面) 朱天色 外面) 白色	A 地区上層	
第 14 図	08	壹	頸部片	外面) 帽子底膨らみタスキ 内面) 背筋付タスキ	精良	良	好	内面) 朱天色 外面) 白色	A ~ 2 レンチ上層	
第 14 図	09	壹 or 要	体部片	外面) 帽子底膨らみタスキ 内面) 背筋付タスキ	精良	良	好	内面) 朱天色 外面) 白色	A ~ 2 レンチ上層	
第 14 図	10	壹 or 要	体部片	外面) 帽子底膨らみタスキ 内面) 背筋付タスキ	精良	良	好	内面) 朱天色 外面) 白色	A 地区上層一括	一部自然釉がかかる
第 14 図	11	壹 or 要	体部片	外面) 帽子底膨らみタスキ 内面) 背筋付タスキ	精良	良	好	内面) 朱天色 外面) 白色	B ~ 2 レンチ下層	
第 14 図	12	壹 or 要	体部片	外面) 帽子底膨らみタスキ 内面) 背筋付タスキ	精良	良	好	内面) 朱天色 外面) 白色	A 地区上層一括	鉛分の付着あり
第 15 図	13	壹 or 要	体部片	外面) 帽子底膨らみタスキ 内面) 背筋付タスキ	白色砂粒混じり	良	好	内面) 朱天色 外面) 白色	B ~ 2 レンチ下部	
第 15 図	14	壹 or 要	体部片	外面) 帽子底膨らみタスキ 内面) 背筋付タスキ	白色砂粒混じり	良	好	内面) 朱天色 外面) 白色	B ~ 2 レンチ下部	
第 15 図	15	壹 or 要	体部片	外面) 帽子底膨らみタスキ 内面) 背筋付タスキ	白色砂粒混じり	良	好	内面) 朱天色 外面) 白色	B ~ 2 レンチ下部	
第 15 図	16	壹	底部片	外面) 帽子底膨らみタスキ 内面) 背筋付タスキ	精良	良	好	内面) 朱天色 外面) 白色	B ~ 2 レンチ下部	
第 15 図	17	壹 or 要	体部片	外面) 帽子底膨らみタスキ 内面) 背筋付タスキ	白色砂粒混じり	良	好	内面) 朱天色 外面) 白色	A ~ 1 レンチ下部	
第 15 図	18	壹 or 要	体部片	外面) 帽子底膨らみタスキ 内面) 背筋付タスキ	白色砂粒混じり	良	好	内面) 朱天色 外面) 白色	A ~ B 地区一括収集	鉛分の付着あり
第 15 図	19	壹 or 要	底部片	外面) 帽子底膨らみタスキ 内面) 背筋付タスキ	白色砂粒混じり	良	好	内面) 朱天色 外面) 白色	B ~ 2 レンチ下部	
第 15 図	20	壹 or 要	底部片	外面) 帽子底膨らみタスキ 内面) 背筋付タスキ	精良	良	好	内面) 朱天色 外面) 白色	A ~ B 地区一括収集	
第 15 図	21	壹 or 要	底部片	外面) 帽子底膨らみタスキ 内面) 背筋付タスキ	白色砂粒混じり	良	好	内面) 朱天色 外面) 白色	B ~ 2 レンチ下部	
第 15 図	22	壹 or 要	底部片	外面) 帽子底膨らみタスキ 内面) 背筋付タスキ	白色砂粒混じり	良	好	内面) 朱天色 外面) 白色	B ~ 2 レンチ下部	
第 15 図	23	壹 or 要	底部片	外面) 帽子底膨らみタスキ 内面) 背筋付タスキ	精良	良	好	内面) 朱天色 外面) 白色	A 地区上層一括	
第 15 図	24	壹 or 要	底部片	外面) 帽子底膨らみタスキ 内面) 背筋付タスキ	白色砂粒混じり	良	好	内面) 朱天色 外面) 白色	B ~ 2 レンチ上層	
第 15 図	25	壹 or 要	底部片	外面) 帽子底膨らみタスキ 内面) 背筋付タスキ	精良	良	好	内面) 朱天色 外面) 白色	A ~ B 地区一括収集	



0 5 10cm

第15図 出土遺物実測図（瓦 1・2）



第16図 出土遺物実測図（瓦 3～5）

(3) 瓦

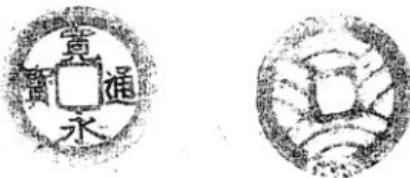
瓦は多くの破片が見られたが、その中で特徴的な4点を報告しておきたい。

①②は棟平瓦で③は丸瓦④は「ガンブリ」である。①の瓦当には中央に朝日と左右に唐草文様を施している。表面には雲母を付着させている。②の棟平瓦は目板瓦と呼ばれるもので、瓦当には中央に花文、左に唐草文様を施している。③は丸瓦で接合部に段を有している所謂、行基式の丸瓦である。下段部の外側からは斜めに切り込みがある。④は棟平瓦の小破片である。⑤は「ガンブリ」と称される棟の一番上に使用される瓦である。目板瓦のように接合部が有段になっている。④と同じように瓦当面に「片の川」の刻銘がある。

以上の瓦についての時期は定かではないが、③の丸瓦は江戸時代の物と考えられるが、他は何れも明治以降の物であろう。「片の川」の刻銘を残す瓦が付近にいくつか見られるが、生産場所についてははっきりしていない。

(4) 貨 錢

A地区からは寛永通宝一枚が出土した。直径2.7cmで、内円径は2.1cmである。中央に0.7cm四方の透かしがある。裏面には青海波文の文様がある。

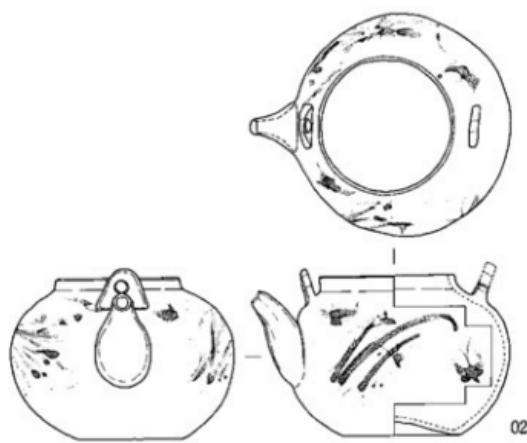


第17図 貨錢拓影図（+）

(5) 磁 器

(01) は甕で口径22.2cm、器高20.5cmを測る。底部はほぼ平坦で胴部から肩部にかけてやや脹みがある。頸部は短くほぼ垂直に伸び、口径部は外側に張り口唇部は平坦である。全体に黒褐色の施釉を行ない、薺灰釉による灰白色の櫛刷毛目を緩く波を打たせながら横に流している。一部は薄い青褐色や淡赤橙色に見える。尚、底部には糸切り痕が残る。

(02) は急須で口径6.8cm、器高8.2cmを測る。底部は上げ底で、胴部が大きく脹み、口縁部は短かく直口している。注口は曲線の溜口で茶滓溜めの孔がある。耳は山形で、蓋は山蓋であろう。全体に乳白色の施釉があり、釉際は腰部に見える。表面、裏面共に薄い藍色で花と蝶の染付がある。染付は粗いタッチで花は表は菊で裏が菖蒲に見える。施釉のない地肌は白色で滑らかである。



0 5 10cm

第18図 出土遺物実測図 陶磁器 (01・02)

(03) は皿片で高台径は7.4cmを測る。高台は低く疊付はやや丸味を持つ。底部中央には径2.9cm、深さ0.2cmを測る凹みがある。全体に乳白色の施釉があるが、底部はこの凹み以外には施されていない。内外面に濃い蓝色の染付で、殆どが印刷染付である。見込の中央に細かな花鳥図が円を描き、その外に幾何学文様を巡らす。更には退化した唐草文様が取り巻き、6カ所に区切り花文を配している。外面は高台及び高台脇に3条の円を成し、体部の施文の一部である菊花文が見える。胎土は乳白色を呈しやや粗い。尚、見込には重ね焼きで生じた乱れが見える。

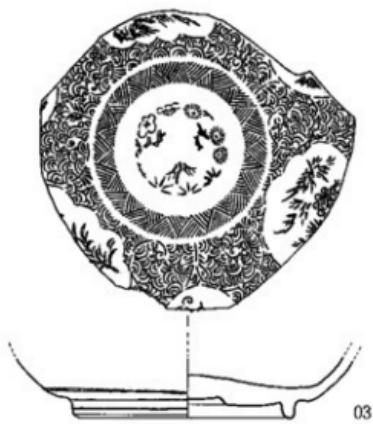
(04) も同じく皿の破片で口径14.5cm、器高4.3cmを測る。高台の高さは0.8cmで疊付は丸い。底部中央には径3.7cm、深さ0.2cmを測る凹みがある。底部にはヘラ切りの際の縦縫皺状痕跡がある。腰部が脹み、胴部から口縁部は直線的に外開きとなり、口唇部は丸くおさまる。口縁の平面形は真円ではなく鈍角な波を持つ。全体に乳白色の施釉があり、内外面に濃い蓝色の染付が行なわれている。(03)と同じく見込中央には細かな鳥図が円を描き、その外側に幾何学文様を巡らす。更には松葉文様が取り巻き6～7カ所に区切り、松と花文を配している。外面は高台と高台脇に3条の円を巡らし、体部に菊花文を染付けている。文様は円を除き何れも印刷染付であるが非常に色が濃ゆく、滲みが見られる。胎土は精良で白色を呈する。

(05) は皿の破片で復原すると口径12.8cm、器高は3.3cmである。高台の高さは0.5cmで疊付は丸く納まる。底部中央には径2.9cm、深さ0.2cmを測る凹みがある。腰部に脹みがあり胴部からはほぼ直線的に外反する。口唇部は平坦であり、口縁部の平面は(04)と同じく真円ではなく鈍角な波を持つ。全体に白色の施釉があるが、見込に蛇の目剥ぎがあり、底部も中央の凹みを除き地肌が見えている。内外面に染付が施されている。内面には見込及び体部に非常に粗雑なタッチで合計3個の棕梠の葉文の染付がある。外面は高台及び高台脇に3条の円を巡らし、体部には花文を印刷染付を行なっている。内面と外面との染付文様は実に対照的でアンバランスを感じる。胎土は精良で色調は白色を呈する。

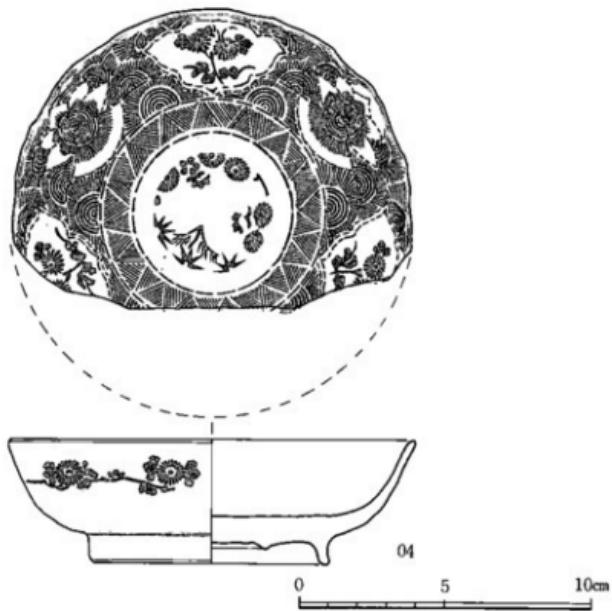
(06) は皿の破片であり、口径12.7cm、器高は3.6cmを測る。高台の高さは0.7cmで腰部が脹らみ、胴部からほぼ直線的に外反する。口唇部は丸くおさまり、疊付はやや尖りがある。全体に明緑灰色の施釉がある。見込には蛇の目剥ぎがあり、底部も中央部を除き施釉されていない。底部中央には凹みが認められる。口縁部は小刻みに屈曲を成している。見込には濃い蓝色で魚の染付が行なわれている。胎土は精良で色調は乳白色を呈する。

(07) は皿の小破片である。高台の高さは0.5cmを測る。鉄分が多く付着し器面は淡黄褐色を呈し嵌入も見られる。内外面に濃い蓝色の染付が見られ、内面の見込には幾何学文様や松葉文様が認められる。胎土は精良であるが焼きがやや不足したものと思われる。

(08) は皿の小破片である。復原すると口径は17cmで器高は2.6cmを測る。内外面に絵付があり全体に灰白色の釉薬が施されている。低い高台で底部にも釉薬が施されている。疊付は切

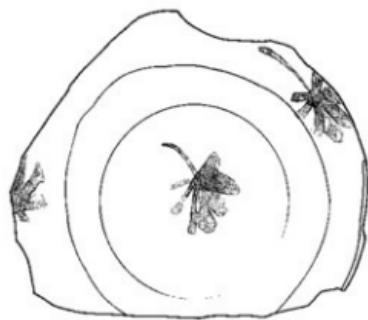


03

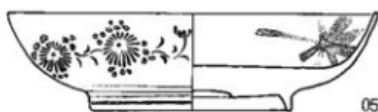


04

第19図 出土遺物実測図 磁器 (03・04)



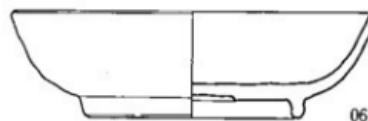
|



05



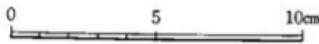
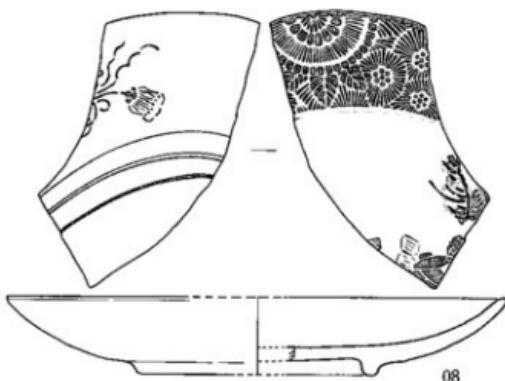
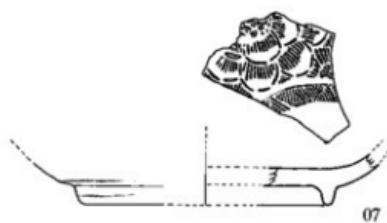
|



06

0 5 10cm

第20図 出土遺物実測図 磁器 (05・06)



第21図 出土遺物実測図 磁器 (07・08)

れている。体部はやや脛み、口縁端部は丸くおさまる。文様は内外面に濃い藍色で施している。見込は花文と思われ、更に菊花文を綿密にあしらっている。外面は高台脇に円を巡らし、胴部に宝尽くし文様の一部が見られる。

109は小皿で口径9.5cm、器高2.3cmを測る。全体的に灰白色の施釉がある。見込には蛇の目剥ぎを行なっており、疊付も施釉が切れている。見込に2つの点と円を巡らし、更に体部の3カ所に染付がある。文様ははっきりしない。

110は小皿の完形品で口径9.4cm、器高2.6cmを測る。高台の高さ0.6cmで腰部から内弯しながら立ち上がり、口唇部は丸くおさまる。所謂平形を成している。全体に薄い明灰色を呈する施釉が厚く行なわれている。見込は蛇の目剥ぎが1.5cmの幅で一周している。内面には薄い藍色で上に3カ所と見込中央部に1カ所の合計4カ所に簡単な文様と染付している。文様が何であるかについては不明である。完形品のため胎土については不明である。

111は小皿で口径10.7cm、器高2.1cmを測る。全体的に灰白色の施釉があり、高台内にも施釉されている。見込には蛇の目剥ぎが行なわれ、疊付は施釉が切れ砂粒が少し付着している。高台から体部は内弯しながら立ち上がり、口唇部は丸くおさまる。見込に円を描き体部には濃い藍色の菊花文を配している。胎土は灰白色を呈しやや粗い。

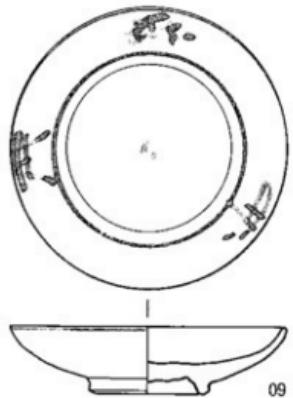
112は皿の破片である。復原すると口径10.8cm、器高2.1cmを測る。高台の高さは低く、体部は内弯し立ち上がる。口縁部は丸くおさまる。全体に灰白色の施釉があり、見込に印刷染付が行なわれている。染付は松と太陽で、松は濃い藍色、太陽は薄いピンク色である。胎土は精良で乳白色を呈する。

113は皿の破片である。復原すると高台径は8.8cmで高さは0.6cmである。高台内の中央部には径3.4cmの大きさで凹みがある。全体的に乳白色の施釉があり、見込に染付が行なわれている。染付は薄い藍色で松と竹である。多分梅を加えて、松竹梅の染付であろう。全体的に造りが丁寧で胎土も精良で色調は乳白色を呈している。

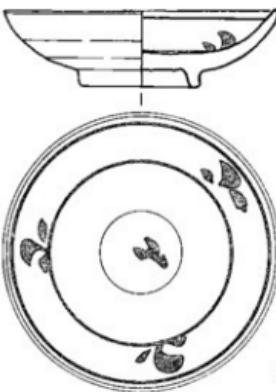
114は小皿で口径11.3cm、器高2.3cmを測る。低い高台で体部は内弯する。口唇部は丸く黒褐色の釉がかかる。多くの濃ゆい藍色の文様がある。見込の中央に富貴長寿の文字があり、体部に小円を並べている。内面は幾何学文様の亀甲文、紗綾形文、麻の葉彫文などの文様を施している。胎土は灰白色で堅緻である。

115は小皿の小破片で復原すると口径10.9cm、器高2.0cmである。低い高台で端部は丸くおさまる。全体に灰白色の施釉があり疊付は施釉が切れている。見込には印刷による染付がある。薄い青色の染付で文様は鳳凰である。胎土はやや粗く色調は灰白色を呈する。

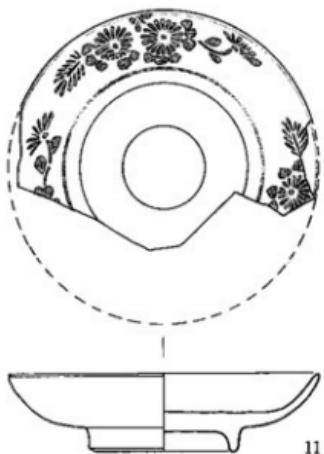
116は茶碗で口径10.3cm、器高6.1cmを測る。高台は1.0cmで高台脇から腰部は脹み、口縁部がやや外反する所謂端反形を呈する。全体には灰白色の施釉があるが、内外面は濃い藍色を使った文様がある。内面は見込に二重の円を巡らし、内円には不明な線を加えている。



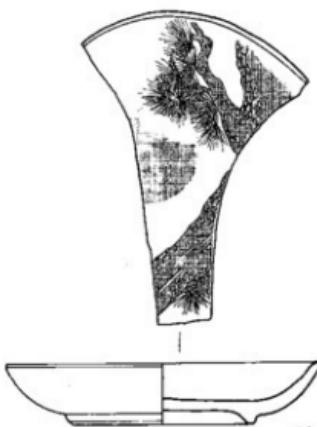
09



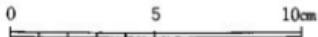
10



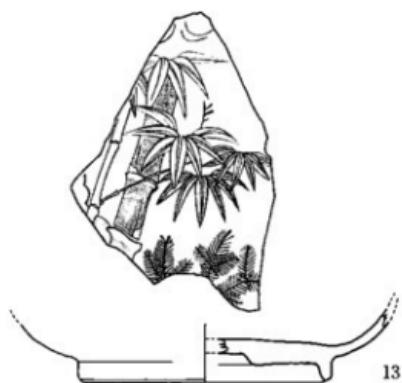
11



12

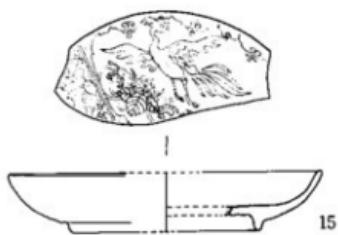


第22図 出土遺物実測図 磁器 (09~12)

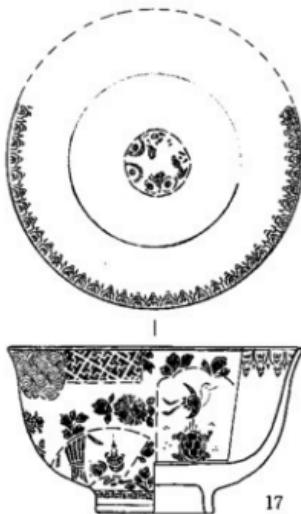


0 5 10cm

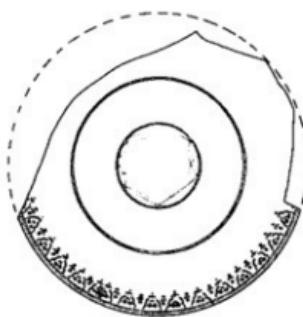
第23図 出土遺物実測図 磁器 (13・14)



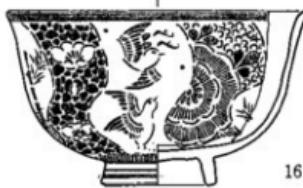
15



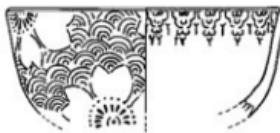
17



1



16



18

0 5 10cm

第24図 出土遺物実測図 (15~18)

口縁内側にはスタンプを巡らしており、スタンプが重なったものも見られる。外面は高台に2本の円、高台脇に鍵手様文を巡らす。体部には2羽の鳥、更には松竹梅と理解される文様がある。外面の殆どは印刷絵付である。尚、疊付の施釉は切れている。やや粗い乳白色を呈する胎土で細かな気泡が見れる。

(17)は茶碗で口径10.2cm、器高5.6cmを測る。乳白色の施釉があり、内外面に濃い藍色を使って施文がある。高台の高さは0.8cmで、体部がやや脹み口縁が幾分反り、所謂端反形を呈する。見込中央の文様ははっきりしない。又、縁内部にスタンプをしているが一部は重なったものがある。外面には多種の文様がある。高台には円を巡らし、高台脇に鍵手様文のスタンプを連結させている。体部には鶴と亀、菊、青海波文、更には柴や宝尽くし文の一部などが見られる。胎土は乳白色を呈し精良である。

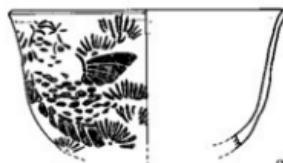
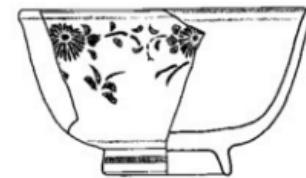
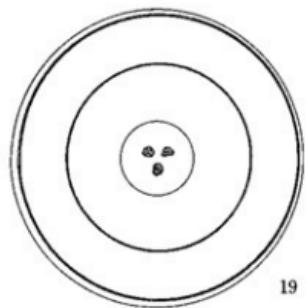
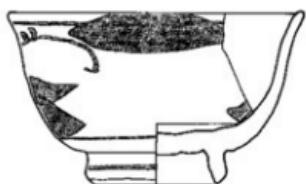
(18)は茶碗の小破片で復原すると口径は9.5cmを測る。胸部から口縁部にかけての反りは少なく碗形と言えよう。口唇部は丸くおさまる。全体に灰白色の施釉があり、ややすくすんだ感じを与える。内外面に文様がある。口縁部内面にはスタンプ染付が巡る。多分に唐花文をモチーフとして、ひどく退化した形を示すものであろう。外面は青海波文に松をあしらったものであろう。青海波文はともかくとして、松は著しい変化を示している。何れも印刷染付であろう。胎土はやや粗い。もし松でなければ青海波文に水車で、水車が著しく変化したものであろう。

(19)は茶碗で復原すると口径10.2cm、器高5.9cmを測る。高台は0.9cmで腰の脹みは少なく、口縁部は僅かに外反する。所謂碗形を呈する。全体には灰白色の施釉があり、内外面に染付がある。見込は円を巡らし、不規則な線を加えている。口縁部内部にも2条の円を巡らす。外面は高台、高台脇、口縁部の3カ所に円を巡らし、体部に花文の染付を行なっている。花文は花からすれば菊と思えるが葉がどうも不自然である。葉だけを見れば寧馨薇か蔓草に見えてしまう。胎土は乳白色を呈し、見込に少し砂粒が付着している。

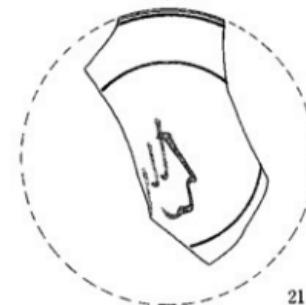
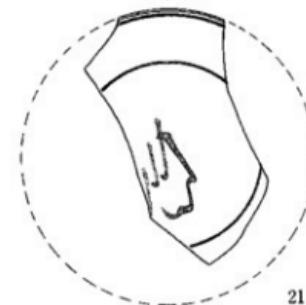
(20)は茶碗の小破片である。復原すると口径9.5cmを測る。腰部がやや脹み、口縁部がやや外反し、端反形と言えよう。全体にややすくすんだ乳白色の施釉があり、内外面に濃い藍色の染付が行なわれている。内面には見込と口縁に3条の円があり、外面は松葉を主とした文様がある。胎土は乳白色を呈し精良である。

(21)は茶碗で復原すると口径10.1cm、器高5.6cmを測る。高台の高さは0.8cmで、腰部がやや脹み、口縁部はやや外反する。端反形の範囲に含められよう。全体的に濁った灰白色の施釉があり、内外面にやや濃いめの藍色の染付がある。内面は見込に細かな点を落とし二重の円を巡らしている。外面は柔かい筆タッチで草花文を染付けている。更に、高台及び高台脇にも円を巡らしている。胎土は精良で色調は乳白色を呈する。尚、見込には重ね焼のための蛇の目剥きが見られる。

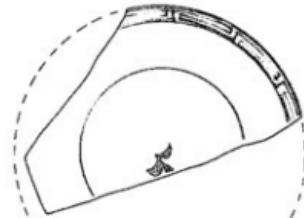
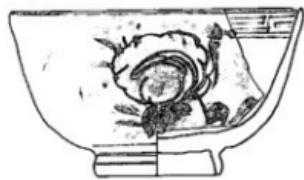
(22)は茶碗で復原すると口径10.1cm、器高5.7cmを測る。高台の高さは0.8cmで、腰部が脹みそ



20



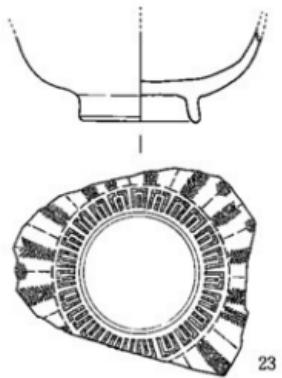
21



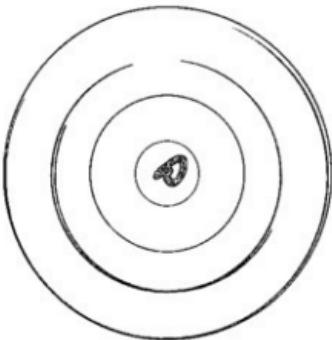
22

0 5 10cm

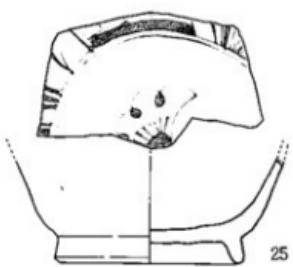
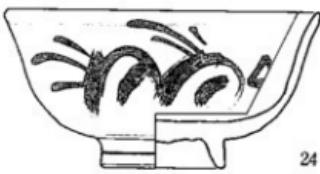
第25図 出土遺物実測図 磁器 (19~22)



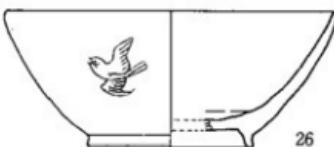
23



24



25



26



27

0 5 10cm

第26図 出土遺物実測図 (23~27)

のままほぼ直線的に立ち上がる。疊付は重ね焼のため釉薬が付着し、口縁部丸くおさまる。全体に灰白色の施釉があり、内外面に染付がある。内面見込はやや薄い蓝色で小円と中央部に小さく点を配し、口縁部には雷文を巡らしている。外面には濃い蓝色で花文を染付し、高台を高台脇に各2条口縁部に1条の円を巡らしている。胎土はやや粗く色調は乳白色を呈する。

㉓は茶碗の破片である。高台径は4.1cmを測る。腰部に脛みを持つ。全体に乳白色の施釉があり、見込には幅1.1cmの蛇の目剥ぎがある。外面に濃い蓝色の染付がある。高台及び高台脇に円を巡らし、更にスタンプによる鎌手様文を巡らしている。腰部から上は矢筈の染付が連結している。胎土は精良で乳白色を呈する。

㉔は茶碗で復原すると口径10.8cm、器高5.4cmを測る。高台の高さは1.0cmで腰部に脛みがあり、ほぼ直線的に立ち上がる。口唇部は丸くおさまる。全体には灰白色の施釉があり、見込の蛇の目剥ぎと疊付は施釉されていない。内外面に蓝色の染付がある。内面は口縁と見込に円を巡らし、中央部に小さな不定形円を染付いている。外面は高台と高台脇それに口縁に円を巡らし体部に山水を染付ている。

㉕は茶碗の破片である。高台の高さは0.8cmを測り、高台内には凹みがある。角を持つ器形である。全体に灰白色の施釉があり、内外面にやや淡い蓝色の染付が行なわれている。文様は小破片であるため不明である。胎土は精良で色調は白色を呈する。

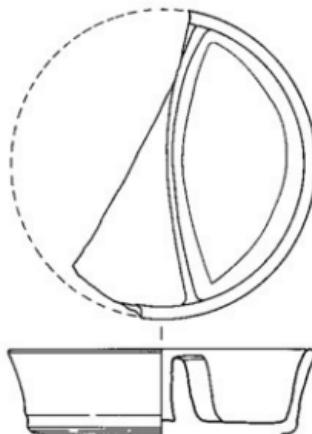
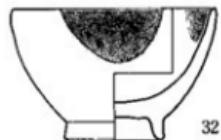
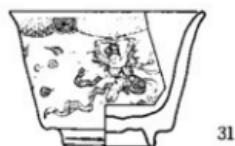
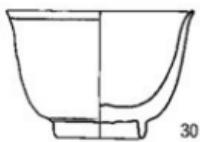
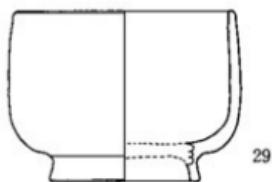
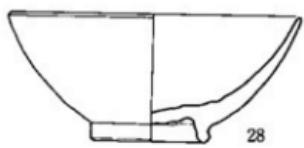
㉖は茶碗で復原すると口径11.3cm、器高4.6cmを測る。高台の高さは0.6cmで、体部はやや脛みながら立ち上がり、口唇部は丸くおさまる。全体に乳白色の施釉がある。一部、見込の蛇の目剥ぎと疊付は施釉が切れている。外面には梅と鳥の印刷染付がある。胎土は精良で色調は白色を呈する。

㉗は盃の破片で復原すると口径6.6cm、器高2.5cmを測る。高台の高さは0.4cmで、胴部は丸味を持ち、口縁部は内弯し立ち上がり所謂武藏野形を呈する。口唇部は細くなつており全体にやや濁った白色の施釉がある。疊付は不純物が付着し施釉が切れている。外面に幾分薄い藍色の草花の染付を行なっている。胎土は精良で色調は白色を呈している。

㉘は茶碗の破片であり、復原すると口径10.0cm、器高4.3cmを測る。高台の高さは0.6cmで、体部は内弯しながら立ち上がり、口唇部はやや平たくおさまる。全体に乳白色の施釉がある。見込は蛇の目剥ぎが行なわれ、疊付は釉薬が切れている。外面は薄い蓝色で松竹梅の印刷染付が行なわれている。胎土の色調は乳白色で精良である。

㉙は湯呑みの破片である。復原すると口径7.6cm、器高5.8cmを測る。高台の高さ0.8cmで腰部が丸味を持ち、胴部、口縁部はやや内傾し直線的に立ち上がる。口唇部は丸味を持ち、疊付は幾分平坦におさまる。所謂、丸腰の湯呑みである。全体に灰白色の施釉があり、細かな嵌入が見られる。胎土はやや粗く色調は灰白色を呈する。

㉚は盃の破片で復原すると口径6.4cm、器高4.3cmである。高台の高さは0.6cmで腰部がや



第27図 出土遺物実測図 (28~34)

や脹みながら立ち上がる。口縁部は小さく外反し、先細りとなる。全体に灰白色の施釉がある。外面の染付は濃い藍色で高台脇に2条と口縁部に1条の円を巡らしている。胎土は乳白色を呈し、やや粗く見える。

(31)は盃の破片である。口径は6.7cmで器高は4.6cmを測る。高台の高さは0.5cmで腰部は角を持ち外反し立ち上がる。口縁部がやや反り、所謂、端反の酒盃である。又、腰部から胴部にかけては角を成している。全体にはやや濁った白色の施釉がある。外面には薄い蓝色で青海波文と天女の印刷染付がある。高台及び高台脇には3条の円もある。胎土は精良で色調は灰白色を呈する。

(32)は盃のほぼ完形品である。口径は7.0cm、器高4.5cmを測る。高台の高さは0.8cmで体部がやや脹みながら立ち上がり先細りとなる。全体に灰白色の施釉があり、口唇部に口ハゲ状に黄褐色の施釉がある。内外面に3個づつ口唇部から半円形の薄い青色の暈状の染付がある。高台にも細い円を巡らしている。胎土は精良で色調は乳白色を呈する。

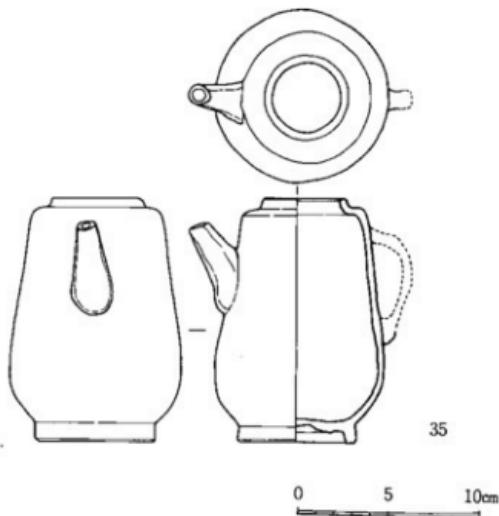
(33)は盃で口径5.6cm、器高5.0cmである。高台の高さ0.5cmで腰部がやや脹み、胴部から垂直に立ち上がる。口唇部は丸くおさまる。全体に灰白色の施釉がある。蓋付は施釉が切れている。外面には藍色の草花文の染付を行なっている。胎土は精良で色調は乳白色を呈する。

(34)は果盆の破片である。復原すると口径10.6cm、器高3.1cmを測る。底部は段を成し更に中央には径3.5cmの浅い凹みがある。腰は角を持ち、一帯の沈線が巡っている。腰部からやや外弯気味に外反し、口唇部はやや丸みを持っている。中に弧を成す仕切りを設け2つに区画を行なっている。底部を除き灰白色乃至黄橙色の施釉があり、細かな多くの嵌入がある。胎土はやや粗く色調は淡橙色を呈する。

(35)は水注である。口径は復原すると4.8cmで、器高は13.2cmを測る。高台の高さは0.8cmで腰部が張り下ぶくれの形状を示す。肩部から段を成して窄み短い口縁部となる。口唇部は丸くおさまる。注口と把手を有し、蓋付であったものであろう。全体に黒鉛釉が掛かり、気泡や高台を中心に砂粒の付着も見られる。内側には茶褐色をした多くの鉄分が付着している。

以上報告をしてきた35点の磁器についてその特徴や生産した窯のわかるものについて述べておきたい。

(01) は薺灰釉による灰白色の櫛刷毛目の特徴を有することから佐賀県唐津市の三島唐津と思われる。(02) は耳が山形である特徴を持つことや乱雜な花文の染付又、底部がやや上げ底になることなどから判断して明治前期に産されたものと思われる。(03. 04. 07. 15. 16. 17. 18. 23) については全く同一のものが、熊本県宇土市網田の網田窯の窯跡から採集されており、同窯産とすることができます。(05) は内面に乱雜なタッチで3個の棕梠の葉文が見られるが、文様の表現法は非常な退化現象を示すものである。特徴的なのは外面に花文があることである。



第28図 出土遺物実測図 陶磁器 35

この花文は(03・04)に見られる花文に非常に類似しており、両者と同じく網田窯産を見ることができよう。この花文を見ると花と茎・葉があるが、花は菊であろう。しかし、茎や葉は菊のものというよりも薔薇や蔓のものを感じ与えてしまう。このことは花文のモチーフが長い間使用され続けるうちに次第に元の状態から離脱し辻接が合わないような花文に変化したものと考えられる。(06)は内面に魚の文様があり(05)とは違っているが、外面の花文は同一のものである。したがって、(05)と同じく網田窯産を見る事ができる。(08)は小破片であり多くを窺い知ることはできないが、文様やつくりは大変精巧である。しかし菊花文や宝くしの文様は本来の姿からかなり退化しており、それは時に時間的な遅れや地方窯産であることを示しているのではなかろうか。(09)と(10)は同じような大きさと器形をしている。加えて施釉の色調や文様それに蛇の目剥ぎの状態など非常に類似している。両者とも網田窯産の可能性が強い。(11)は(09・10)よりもやや大きくつくられている。内面に見られる菊花文を手懸かりとすれば(04・05)の外面に施された菊花文に非常に類似している。そしてそれは(05)で指摘したように草花文の本来の姿に離脱したように描かれると同じ特徴を有しているのである。しかしながら、両者の菊花文には細かな相違も見られる。敢えてそれを述べれば(04)の外面に見られる菊花文に比べて、(11)の菊花文は茎や葉の表現に力強さがあり菊の本来の姿により近いことが指摘できよう。しかし色鍋島の皿の裏文様の殆どは薔薇や唐花文それに蔓草文が多く、菊は少ない傾向があり、花文そのものによりリアリティーがあったとしても、それが直接により古い

様相を残存しているとの思いには結びつかないようである。何れにしろ、⑪は⑭と同じ網田窯産の皿として捉えることは充分である。また、網田窯の採集の小破片の中にも非常に類似する資料があることをつけ加えておきたい。⑫は二色を使った唯一の資料であり、日用雑器的様相の非常に強い皿である。網田焼は藍色の染付だけで色絵の産出は伝えられておらず、生産した窯については明らかにしない。⑬は小破片であるが、松竹梅を染付けた中にかなりしっかりした絵付の技法が見え、造りも精巧である。時期的には江戸期に遡る可能性が強い。⑭は印刷染付であるが、非常に綿密な絵付を行なっている。濃い藍色を用いており、幾何学文様を連続させることなどの特徴は九谷窯の流れを汲む可能性が強い。⑮は小皿の小破片であるが、内面に印刷染付された文様は鳳凰である。鳳凰を覆う羽根などの表現は全く省略され、頭部の嘴や鶏冠なども非常に雑に処理されている。このように文様の著しい粗雑化はいわゆる日用雑器として多量に生産されたことを物語るものであろう。生産窯については定かにしない。⑯は外面に濃い藍色で菊花文を染付けており⑭や⑮の外面に染付けられた菊花文に非常に類似している。また、灰白色を呈する施釉の色調は⑪と同一であり、網田窯産と述べることができよう。⑰は濃い藍色で松竹梅を染付けたことが窺われる。文様は粗い表現で一部には滲みがある。⑱は外面に柔らかい筆タッチで草花文の染付を行なっている。この（⑳・㉑）も網田焼であろう。㉒は非常に濃い藍色の染付であり、花文を柔らかいタッチで且つ大胆に描いている。また、口縁部内側の雷文も、今までに網田焼としたものには見られない特徴である。生産窯は定かにし得ない。㉓は外面に山水を表現しており㉔に非常に類似する。網田窯採集資料の中にも類似するものがあり、網田焼と見られよう。（㉕～㉘）についての生産窯は不明である。㉙は全体に灰白色の施釉があり、細かな嵌入が見られる。これは白薩摩・福荷窯産のものであろう。猪、小破片であるが黒釉や小紋肌釉もほかに出土している。（㉚～㉜）についても産出窯は定かでない。㉖は灰白色乃至浅黄橙色の施釉や細かい多くの嵌入があることなどの特徴から萩焼ではなかろうか。㉗は全体に黒船釉が掛かり黒薩摩であることを示している。

（6） 網田窯産磁器の特徴について

今回、本遺跡から出土した磁器の器種には、壺・皿・茶碗・盃・湯呑み・果盒・急須・水差などがある。これらは一般的な家庭における日用雑器としての性格を有するものがほとんどである。前に述べたように量的に多いのは網田焼であることを明らかにしたが、このほかでは薩摩焼や唐津窯産のものがわずかに見られる。地元で焼かれたものが地元で多く使用されていることはいわば当たり前のことかもしれない。

今まで網田焼については詳しく述べられた例が少なく、その実態はよくわかっていないのが、実情である。一応、本遺跡で出土したものに限ってその特徴をまとめておきたい。なお、出土した磁器の中で網田焼と今回断定したものは、網田窯跡を訪ね、現地で表面採集をしたものと、宇土市社会教育課に保管されている資料で比較をして同一のものが見られたものに限つ

た。また、網田焼と断定した資料に多くの類似を強く持つものに限った。各々の特徴については、すでに述べてきたとおりであるが、網田焼としたものは（03・04・05・06・07・11・16・17・18・19・20・21・23・24）の14点である。以下その特徴をまとめておきたい。

器種には皿（03・04・05・06・07・11）、茶碗（16・17・18・19・20・21・23・24）の2種類が認められた。

皿は文様の特徴から大きく3種に分類が可能であろう。

A類（03・04・07）：内外面に濃い藍色の印刷染付がある。内面の見込み中央に細かな花鳥文を配し、その外側には空白部分をはさみ斜線で連結する三角文の幾何学文様をめぐらす。さらに松葉でとり巻いている。松葉の間の6カ所には菊花文か松葉文、松竹梅文を配している。外面には菊花文を染付けるが、茎は薔薇や唐草的イメージが強い。また高台と高台脇に2～3本の線を巡らしている。なお04のように口縁部の平面形が円でなくゆるやかな角を持つものがある。底部中央には凹みがある。

B類（05・06）：内外面に蓝色の染付がある。内面に棕梠⁰⁵や魚⁰⁶の文様を染めつけている。この文様はかなりくずれた形になってしまっている。外面には花文の印刷染付が行なわれている。A類と同じく菊花文であるが、茎や葉は薔薇や唐草文様に近い。高台及び高台脇に2～3本の線を巡らしている。口縁部の平面形は円形と波があるものとがある。底部中央には凹みも見られる。

C類⁽¹⁾：やや小型の皿で、内面に濃い藍色の染付を行なっている。見込みに蛇の目剥ぎを行ない、口縁部内面に2本の円を巡らしその間に菊花文を施している。菊花や葉文は印刷染で全体的に力強い。

茶碗は文様の特徴から大きく2種に分類できよう。A類（16・17・18・19・20・23）は印刷染付が行なわれたもので、B類（21・24）は筆による染付が行なわれたものである。

A₁類（16・17・18）：外面の多くに濃い藍色で印刷染めを行なっている。¹⁶では鶴亀、柴、宝づくし文、菊、青海波文などの文様がある。¹⁷は鳥とくずれた松竹梅で、¹⁸は青海波文と水車である。内面は口縁から唐草文を著しく退化させたようなスタンプを巡らしたもの（16・17・18）や、見込みに二重の円を施し、菊花文¹⁶、不規則な曲線文¹⁷などに分けられる。

A₂類⁽¹⁹⁾：皿の内面や外面に見られるような菊花文を外面に印刷染付したもの。内面見込みに意味の不明瞭な線がある。

A₃類⁽²⁰⁾：外面にかなりくずれた松葉を主とした印刷染付を施すもの。

A₄類⁽²³⁾：高台脇に鍵手様文のスタンプを巡らす。全体には矢筈文を印刷染付けるものである。

B類（21・24）：外面柔らかい筆タッチで草花文²¹、山水²⁴を染付けている。染付は藍色で²¹は濃く、²⁴はやや薄い。

以上のような特徴を述べることができよう。

さらに全体的には、

- ①染付が濃い藍色であること
- ②スタンプによる染付があること
- ③印刷染付が主であること
- ④文様のはっきりしないものがある
- ⑤辻摺の合わない文様の組合わせがあること

などの特徴もつけ加えることができよう。このことは細川藩唯一の白磁窯として栄えた網田窯の江戸期の生産物とに大きな隔たりがあることを指摘できよう。明治以降、大正年間まで窯は一般庶民の日用雑器をつくりながら存続したことが明らかにされているが、今回の資料はいずれもこの時期に相当し、明治前半から中期のものとしておきたい。いずれにしろ、今回の資料は網田窯から生み出された磁器の中で、時間的にまた量的にごく限られたものにはかならないが、今後一個づつ資料を積み重ねて、網田焼の実態を少しづつでも究明していくなかでの一つの資料を呈示したことになろう。

第Ⅳ章 結語

方見堂遺跡は当初方見堂古墳として捉えられ、国道3号拡幅工事に先がけ事前の発掘調査が実施されることになったものである。周知の如く付近は、八代大塚古墳や鬼の岩屋古墳など多くの古墳が存在する著名な古墳群地帯である。方見堂の堂前に散在する大きな石灰岩、硬質砂岩を古墳の石材と見ることは妥当なところで、方見堂古墳とされたものである。

今回の調査は国道3号の拡幅部分の調査であるため面積が限られ、散在する石材も東側の一部がかかる程度であった。しかし、石材が散在する部分が古墳の石室部分であるとするなら、その内部主体や、その外側に封土や周溝の確認ができると予想された。調査の結果は既に報告したように古墳に係る遺構は認められず、少なくとも今回の調査地に限っては古墳は存在しないことが明らかとなった。一応、調査地をA、B地区に分け合計4カ所にトレンチを設定した。以上のトレンチからは、主目的とした古墳に係る遺構は認められなかったが、各トレンチからは弥生土器・須恵器や土師器・瓦・磁器などが出土した。弥生土器は実測も出来ない程の細片であるが、胎土や焼成、調整痕などから弥生後期土器片と考えている。その包含層は海拔3.87m～4.04m上にあり、今後のこの地方の調査での目安とできよう。瓦には「片の川」の刻名がある。付近の古老を主にたずね歩いたが工場を記憶していたり、伝え聞いたりした人には会えなかつた。大正期から付近で土瓦工場にたずきわっている人に聞くと、八代市平山には古くから瓦工場があったという。また、片野川地区に瓦工場があったという話は聞いていないということである。しかしながら「片の川」の刻名のある瓦は八代市内でいくつか見たことがあるということで、付近に瓦工場があった可能性は非常に強いと語ってくれた。

今回の遺物の中には磁器が多く含まれており、その生産窯や時期を知ることは非常に困難なことであった。近くでは高田焼窯が著名であるが、今回の遺物の中には見いだすことができなかつた。しかし、多くの磁器は宇土市網田窯で生産されたものであることが判明した。網田窯跡で表面採集した資料や宇土市教育委員会に保管されている資料との対比を行なつての結果である。網田焼とした磁器はいずれも一般庶民のいわゆる日用雑器的なものばかりであり、また、磁器の内外面に見られる染付文様はいずれも、江戸期の網田焼に見られるような優美さと端正を失したものである。これらのこととは結果的に、今回の資料を明治前期から中期のものと敢えて述べさせた。加えて薩摩焼や佐賀県唐津窯産の磁器も少量ではあるが含まれており、仮に同時代に共伴したものと見なすならば、地元の磁器窯産のみならず他地域の磁器が流入する状態にあったことを示すものであろう。すなわち、本遺跡は当时においても交通上便利な位置にあり、商業交易も盛んに行なわれていたものと思われる。そして、他地域からの磁器の流入に対して地元窯の対策の一つが今回の資料の中に見られよう。文様の退化：印刷染付：スタン石染付：文様

の簡略化：このような中に意図された大量生産的志向、そして、コスト低下に伴う需用拡大を囲り他地域からの磁器流入に対処し、商業利潤を求めていったのであろう。

網田窯は大正8年にその窯の火を消すことになる。それは商業としての成り立ちが出来ない状態に追い込まれての結果と解されるが、今回出土した資料はその陰りを見せるものではあるまい。

参考文献

- 加藤唐九郎編、原色陶器大辞典、淡交社、1975
今泉元佑、陶磁大系、平凡社、1979
熊本県教育委員会編、「網田焼」『熊本県文化財ハンドブック』、1975
京都府文化財保護基金編、文化財用語辞典、第一法規、1976
佐賀県立博物館編、「古唐津展」、1978
佐賀県立九州陶磁文化館編、「九州陶磁展」、1980

註

八代市大村町

山田土瓦工場、山田一人・山田祐次氏におたずねをした。本稿の校正中に連絡があった。それは予想通り、八代市中片野町に瓦工場が存在していたことが判明したということである。

図 版



八竜山から見た方見堂遺跡



調査地近景(北から)

図版 2



方見堂板碑(右)



方見堂板碑



石材散在状態



石材散在状態

圖版 4



石材散在狀態



石材散在狀態

上、A-2
トレンチ(北から)



下、A-2
トレンチ土層状態



図版 6



石材下状態



石材下状態



A-1 トレンチ土層



B-1 トレンチ(南から)



周辺遺跡（天神古墳）



周辺遺跡（天神古墳石材）



周辺遺跡（鬼の岩屋古墳）



周辺遺跡（御経塚古墳）

図版 10



周辺遺跡（茶臼山古墳四方仏）



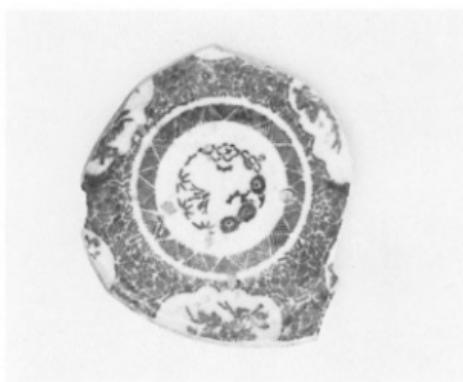
周辺遺跡（茶臼山古墳四方仏）



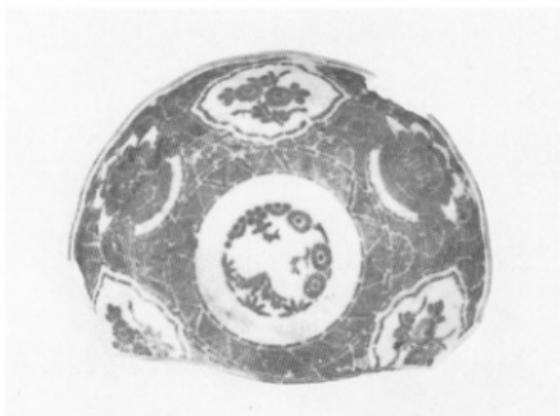
出土遺物(瓦・貨銭)



出土遺物(土師器・磁器)



03



04

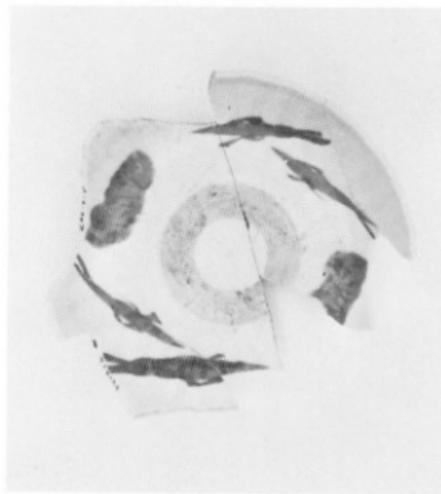


04

出土遺物(磁器 03・04)



05



06

出土遺物(磁器 05・06)



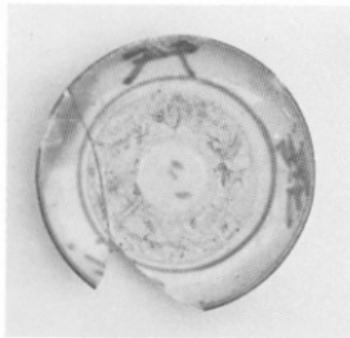
07



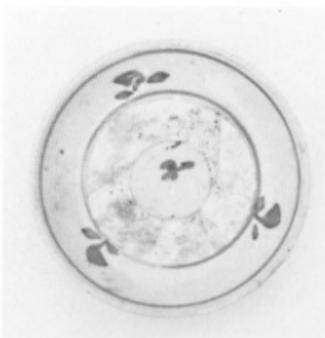
08



09



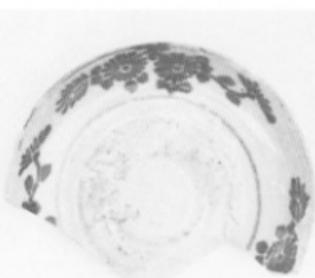
09



10

出土遺物 (磁器 07~10)

图版16



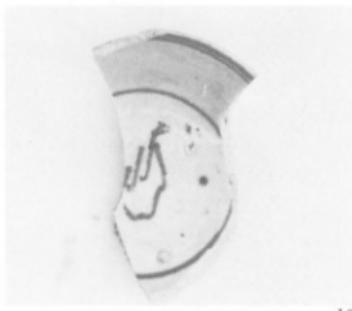
11



19



14



19



13

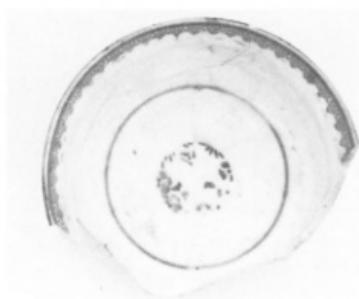


20

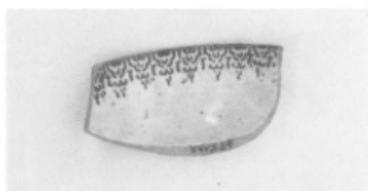
出土遺物(磁器11~20)



17



16



18



16



18



30



31

出土遺物(16・17・18・30・31)

図版18



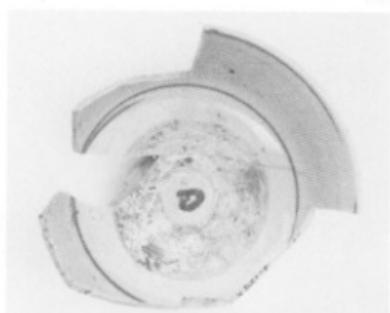
21



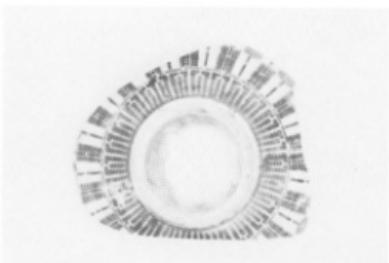
22



23



24



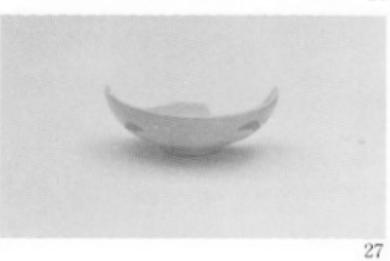
25



26



25

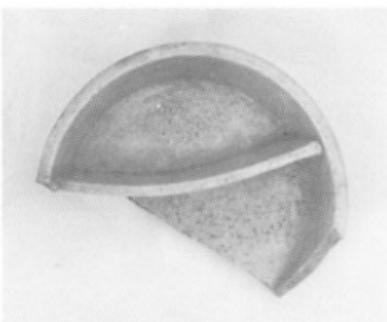


27

出土遺物(磁器 21・22・23・24・25・27)



32



34



33



34



出土遺物(磁器 32~34)

熊本県文化財調査報告 第52集

方見堂遺跡

昭和56年3月31日

編集 熊本県教育委員会
発行 〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号
印刷 熊本県印刷センター
〒860 熊本市清水町高平1255

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 52 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：方見堂遺跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL : <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会

URL : <http://www.kumamoto-bunho.jp/>